
COBALT-SERIES
鬱金の暁闇16
うこんのぎょうあん
破妖の剣6
前田珠子
イラスト／小島 榊
集英社



COBALT-SERIES

破妖の剣　6

鬱金の暁闇 16

前田珠子

集英社

Fate of Evil


破妖の剣



COBALT-SERIES

破妖の剣 6

鬱金の暁闇16

前田珠子

集英社

目次

鬱金の暁闇 16

第四十八章　胸に抱くもの……13
第四十九章　秘められた意図……65
天を支える者　外伝　憧れは遠くに置きて抱くもの……119
あとがき……197

破妖の剣　鬱金の暁闇

これまでのあらすじ

創造神ガンダルの生み出した世界、ガンダル・アルス。人々は複数の命と強大な力を持つ魔性たちに脅かされていた。彼らに対抗できる力を持つ人間たち――封魔の力を持つ捕縛師、滅魔の剣に選ばれた破妖剣士、魔性を味方に引き入れる力を持つ魅縛師――が「浮城」に集い、魔性との戦いに尽力していた。

ラエスリール(ラス)は、金の妖主を父に、かつて城長だった魅縛師を母に持つ少女。浮城屈指の破妖刀「紅蓮姫」に選ばれた彼女は破妖剣士として著しい活躍をするが、闇主という謎の魔性に愛され翻弄され、魔性として生きることを選んだ弟・乱華には歪んだ執着心で追いかけられ、彼女はなにかと切れぬ絆や因縁がつきまとうのだった。

妖主の一人、翡翠の妖主を滅ぼしたラスは、父の配下の魔性や紅蓮姫奪還チームに追われ、護り手の闇主とともに逃亡していた。しかし父によって仮死状態にされ、永い眠りにつく。その後紅蓮姫の第二の使い手として、奪還チームの一人であるアーゼンターラが選ばれる。そんななか第六の妖主（雛の君）が誕生。妖主たちを配下に従え、世界を破滅へ導こうとしていた。母チェリクによってラスの意識は永い眠りから目覚め、肉体へ戻ったが、雛の君は世界の破滅を導く『破壊の鍵』を取り出すことに成功する。ラスは雛の君に対峙するが、そこに現れたのは実父・金の妖主だった。父に刃を向けることをためらっていたラスも遂に迷いを捨て、父の心臓に紅蓮姫を突き立てる。そんなラスを父は認め、雛の君と等しく、新たな世界の「女皇」となる資格があると宣言し、第二の妖主である闇主もラスに跪くのだが…!?

妖主たち

金 **王蜜の妖主**
ラスの父。最愛の妻を亡くして以来、姿を消す。

赤 **柘榴の妖主**
クセ者ぞろいの妖主たちの中でもかなりの強者。

緑 **翡翠の妖主**
夢に通じる力を持つ。ラスによって滅ぼされる。

第六の妖主(雛の君)
緑の妖主の死により現れた新しい妖主なのだが…。

白 **白焔の妖主(白煉)**
熱に通じる力を持つ。一時期人間だった。



夫婦?

紫 **紫紺の妖主(藍絲)**
糸に通じる力を持つ。白煉に執着している。



娘



息子

ラエスリール(ラス)
破妖刀「紅蓮姫」の使い手。半人半妖で魅了眼を持つ。不器用な性格。



アーゼンターラ(ターラ)
現在「紅蓮姫」の使い手だが、悩みも深い。

リメラトーン(トーン)
妖貴の大火で生き別れになっていたターラの弟。

姉弟

オルグァン
破妖剣士。「氷結斬」と呼ばれる破妖の斧を使う。



スラヴィエーラ
破妖刀「夢晶結」を操る、破妖剣士の少女。

マイタード
捕縛師。自らの刺青に魔性の命を封じ込める。

懐いている



邪羅(ザハト)
妖主夫婦の息子で、ラスを姉のように慕う。

紅蓮姫奪還チーム

破妖の剣 人物相関図

親友

チェリク
浮城の元城長で、伝説的魅縛師だが妖主と結婚。

夫婦

マンスラム
浮城の前城長。ラスを養女として育てた。



息子



乱華(リーダイル)
ラスの弟。魔性として生きる超弩級のシスコン。



濫花(リー)
ラスが拾った半人半妖の少年。乱華に酷似。

懐いている

アーヴィヌス
現在の城長。かつては捕縛師として活躍した。



闇主(干禍)
ラスの護り手。壮絶な美しさと極悪非道な性格は魔性のなかでも群を抜く。

護り手



セスラン
捕縛師。人あたりはいいが、実は食わせ者!?



彩糸
リーヴシェランを溺愛する美しく聡明な護り手。



サティン
面倒見のよい捕縛師。ラスの姉のような存在。

護り手



リーヴシェラン
琴の音を用いる魅縛師で、気の強い美少女。

浮城における ラスの理解者たち

イラスト／小島　榊

第四十八章　胸に抱くもの

1

美しい、蜜のような髪を引き抜き、少女は自らの力の根源たる琴に張る。
指で弾き、音を奏でるには脆弱すぎるそれはしかし、少女の指に奏でられる限りにあって、精妙にして独特な響きを奏でる。
魅縛師リーヴシェランにのみ可能とされる、自身の髪を弦として奏でる魅縛の音色。
それを、彼女は今まさに世界に放とうとしていた。
世界はいま、魔性に蹂躙されつつある。
世界中の魔性の皇を名乗る存在の宣言により、魔性は終末が近い世界で遊ぶことに躊躇いがない。
次の世においては存在がないと言い切られた人間を弄ぶことに。

そんな最中にあって、それでも少女は躊躇いなく自らの髪を弦に張り、その魅縛師の力を放とうとしていた。

場所は、どこまでも見通せるような広い、広い草原。

そばには誰もいない。

虹色の髪の守護者は、すでに彼女のそばにはいない。

我が身を擲ってでも護ってくれるひとは、もういない。

そうと知っても、少女はこの行為に踏み切った。

そうすることを選んだ。

本当は——時間さえ許すなら、こんなことになった事情を解明したいところだったけれど、事態はあまりにも急に変わり、自らできることがあると知る身で、他の事情に集中していられる状況ではなくなってしまったのだ。

魔性は人間を憎んでいる。

それが根源にあるがゆえに、女皇と名乗る魔性の支配者は新たな……次の世においては人間の存在を最初から排除すると宣言した。

どうしてなのか——どうしても知りたいと思った。
女皇のその強すぎる想いが、自分にとってかけがえのない存在を奪ったのだ——。
その理由を知りたい、と。
だが、それと同じほどの強さで思ったことがある。
人間の未来の消失——それだけは、させない、と。
理由を知れば、解決策は見つかるかもしれない。だが、その前に人間は女皇の声を聞いた魔性たちによって根絶やしにされてしまうかもしれない。
だとしたら——。
リーヴシェランは悩んだ。
浮城の皆が、そうさせぬために動いている。未来に光があるかどうかもわからないまま、それでも黙って滅ぼされるのは御免だと、足掻くという言葉が似合う行動に奔走している。
では、自分はどうするのか。
女皇の抱く憎悪の根源を解明するのか、それとも他の皆と同じくこの世界を動かす

嵐を止めるために動くのか。
そのために、何ができるのか。
考えて、考えて、考えて……リーヴシェランが選んだのがこの行動だった。
思いの丈をこめて、彼女は琴を弾く。
彼女の思いを乗せた琴の音が世界に響き渡る。
彼女の思い、願い、祈り——全てを乗せた琴の音色が世界を震わせ、染みこんでいく。
大きすぎる悲しみと、切なる願いと、不屈の思い——。
様々な想いが溶け合った音色が奏でられるなり、リーヴシェランは周囲の気配が変化していくのを感じた。
馴染んだ感覚だったから、彼女は動揺したりはしなかった。
たとえ、その気配がこれまでに経験したことがないほど殺意に溢れたものであったとしても……自分を玩具のように嬲り殺す気満々で引き寄せられることを選んだ魔性たちの気配であることを認識しても——覚悟の上のことだ。

恐怖に動きを止めたりはしなかった。
彼女はひたすらに想いを乗せて琴を弾く。
今現在の自身の心を音に乗せて世界に放つ。
一曲を奏で終えた時、彼女の周囲に集った妖鬼の数は五十にも及んでいた。
琴から手を放した彼女は、その彼らひとりひとりをきっちりと見つめて——そうして口を開いたのだ。
「よく来てくれたわね。礼を言います」
魅縛師らしからぬ言葉に、集った魔性たちの間にさざ波のような動揺が走ったが、リーヴシェランは構わず言を継いだ。
「今日は、頼みたいことがあって、琴を弾いたの。集ってくれたのは、聞く耳を持つ者だと思うから、率直に言うわ。女皇と名乗るひとが何を言ったのか、わたしは知っているわ。けれど、あえてお願いしたいの。その言葉に従うのはもう少しだけ待って、と」
お願い、お願い、お願い——。

祈りをこめて、リーヴシェランはそう告げた。

※

嗚呼、駄目だ。
界を隔てた空間で、待機していた邪羅は思った。
もともと可能性は低いと思っていた。
女皇の宣言があった以上、魅縛師の要請に本気で応える魔性の確率は天文学的に激減している。人間に未来がないと女皇が告げたのだ、人間を護るための人間側の力が激減するだろうことは邪羅にとっては想定内のことだった。
もちろん、そのことはリーヴシェランにもイヤというほど言い聞かせた。
邪羅にとって、大事な大事な少女なのだ。
馬鹿で無謀な挑戦で喪うなど到底認められるはずもないほどに。
それでも彼女は挑むことを止めようとしなかった。

その意志――あるいは命の輝きに、邪羅は諦めさせること、を諦めた。
譲れない何かを抱えている彼女は止まらない。
ならば、好きにさせるしかない、と。
だが。
彼女の今の言葉を聞いて、イヤでも邪羅は悟ってしまった。
駄目だ。
こんな言葉では、魔性は……動かない。
確信してしまう。しまえる。
それほどに、女皇の言葉は重いのだ。
従うつもりはない。従えるはずもない。女皇の告げる未来は、自分の望むそれとは違いすぎる。
だから、邪羅は女皇の言葉には従わない。
だが、自分ではない、自分より遙かに力のない者たちにとって、彼女の言葉が絶対的であることは理解できる。

人間よりは頑強にできているとはいえ、複数の命を持っているとはいえ、それでも上級魔性である自分たちからすれば、妖鬼や小鬼の命は弱すぎる。小さすぎる。

圧倒的他者の言葉に抗えるほどの力はない。

人間である側が、より小さな力しか持たぬ身であることは確かだが、女皇の宣言によって、人間はあくまで『滅ぼされる』側に立たされた存在だ。

滅びたくなければ抗うしかない。

窮鼠猫を嚙むという言葉もある通り、追い詰められた者はいかに小さな存在であろうとも、生き延びるために抗うものだ。諦めが即、死を意味する以上、生きたければ抗うしかない。

だから……リーヴシェランも他の浮城の面々も――そればかりでなく地上の人間全てが、生き残るために必死になる。

だから、リーヴシェランの言葉は、同じ身の上である相手に対してなら有効かもしれない。

魔性に蹂躙された人間に向けられたものであったなら、彼女の叫びは有効に働くか

もしれない——だが。

ここに集うのは魔性ばかりだ。

今にも滅ぼされそうな人間ではなく、滅ぼす側に立つ、だが決して高位とは呼べない——底辺に近い場所に生きるモノたちばかりだ。

彼らは浮城の住人には知能が低いと認識されがちだが、一概にはそうは言えない存在だということを邪羅は知っている。

そうでなくて、どうして人間の社会に溶け込める？

人間の心の隙を縫って油断を誘い、その命を啜れるというのか。

ある意味、下級魔性である彼らほど、人間の心に通じるモノはいないのだ。

魔性の世界に在っては卑小とされる彼らは、上級魔性よりよほど人間の心に通じており……そして同時に、上級魔性の脅威にも通じている。

上位にある魔性にどんなことが可能で不可能かを、彼らはよく知っている。

そして、人間がどれほど頑張ったところで、できることとできないことがあることも。

彼らほどわかっている存在はない。
だからこそ――邪羅にはわかってしまった。
駄目だ、駄目だ。
リーヴシェランの先ほどの言葉では、彼らを動かすことはできない、と。
そもそもが、魔性は強い力に惹かれる。
女皇の放つ力は現在世界最強だ。
その女皇が告げたのだ――次の世界に人間は生まれぬ、と。
だから、遊ぶなら今のうちだ、と。
力が絶対の魔性にあって……しかもその底辺に位置するモノたちにとって、女皇は絶対者に等しい。その言葉に抗うことなど考えもしないに違いないのだ。
仕方ない……か。
そろり、と邪羅は気配ごと身を起こそうとした。
気取られぬよう、気取らせぬため、敢えて完全に消していた自らの気配を目覚めさせながら、彼はリーヴシェランのいる場所へと立ち入ろうと、した。

このままでは、リーヴシェランの身が危うい。

女皇の力に従う魔性たちは、感情に任せて「反乱」をそそのかした彼女を許そうとはしないだろう。

彼女の首を狩り、それを手土産に、女皇へ直談判する気を起こすモノさえ出現するかもしれない。

それだけは、認められない。

少女は「ぎりぎりまで待って」と言った。

自身の賭が確率の低いことをわかっていたからのことだと思う。

一応頷いたのは、そうしないことには、自分の知らぬ内に勝手に動くに違いないと確信したからだ。それぐらいなら、後々約束を反故にしたことをえんえん、えんえん、えんえん怒られることになろうとも、見張っていられるほうがましだと思ったからだ。

そして、今は——。

多分恐らく絶対に——命を救われたと感謝することなどない、それどころか「説得途中で茶々を入れた」と生涯怒りくるうこと間違いなしのこのタイミングで。

それでも、邪羅は動かずにはいられなかった。
リーヴシェランの怒りはそれなりに恐ろしかったが――ことに彼女の実力行使は――それ以上の恐怖が、この時彼の心を支配していたのだ。
リーヴシェランを喪う。
それ以上に恐ろしいことはない。
命には、必ず終焉がある。
強大なる父にすら訪れた終わりは、人間に過ぎぬ少女には遠からず必ず来る。
それは仕方ない。人間である以上、それは避けようがない。
だが、それは可能な限り遠ざけたい事象だ。人間である少女がずっと生きているとは思っていないし、それを無理矢理永らえさせようとも思っていない。魂をねじ曲げてしまったら、少女は自分の知る、好ましく思う少女ではなくなってしまうだろう――喪いたくないだけの理由で、彼女を歪めるつもりはない。
だが――そうではなく、彼女が彼女として生きているこの今、その命を縮めることは邪羅にとっては認められることではない。

リーヴシェランがリーヴシェランとして、彼女自身の生を歩んでいる今この時、その命が摘み取られる危険を、邪羅は決して看過できない。

ここまでだ――。

意を決し、自らの気配を解放してリーヴシェランを護ろうとした、まさにその刹那のことだった。

五十を超える下級魔性たちの気配を遙かに凌駕する、圧倒的な力が少女のそばに出現したのは――。

「可愛いことを囀る小鳥だ」

界を違えた場所にある邪羅の耳にもはっきりと聞こえたその声は、艶やかな女性のものだった。

そうして現れたのは、漆黒の髪と双眸を持つ妖貴の女性。

女皇の宣言以来、妖貴が人間の前に姿を現すことは――以前に比べればの話だが――珍しくはなくなっている。ことにここ数年の間に生まれた新参の妖貴は人間で遊ぶために、嬉々として行動を起こしている。

だが、これは――この妖貴は、違う。
邪羅は直感した。
そして、それは正しかったのだ。

※

リーヴシェランはその刹那、世界が闇に包まれたかのような錯覚に見舞われた。
たったひとりの妖貴の出現によって、それまで自分がいた蒼穹の空とどこまでも広がる草原が闇に塗りつぶされる。
心臓が押しつぶされそうな圧迫感を覚えながら、彼女は声のした場所を凝視した。
圧倒的な力と存在感を誇示しながら、その女性は悠然と佇んでいた。
存在することだけで他者を圧倒する、存在力とでも呼ぶべきものを纏って、漆黒の魔性が降臨していた。
その出現だけで、彼女の琴の音に集った五十を超える妖鬼たちのほとんどは消えて

しまった。

同じ場にあることが耐えられずに逃げ出した者が半数、リーヴシェランを嬲り殺したいという未練を捨てきれずに留まろうとした結果、その力に押しつぶされた者が約半数――世界を闇に塗りつぶした魔性は、その場に残ったごく少数の妖鬼たちに面白そうな視線を投げたあと、リーヴシェランを見つめた。

どくり、と胸が軋む。

息をすること、心臓が脈打つことさえ、相手の許しなしには難しい――それほどの圧倒的な力を放つ妖貴を前にして、リーヴシェランは悟った……悟らざるを得なかった。

これは、本物だ、と。

人間が知る由もない本物の闇を纏う、本当の意味で恐ろしい『漆黒の魔性』――永い年月を生きてきた妖貴なのだと。

リーヴシェランはかつて、妖主と対峙したことがある。

紫紺の妖主に、柘榴のそれに。

だが、対峙するだけで命の危険を覚えたことはない。
ただ相対する――それだけで、命がすり減らされるような圧迫感を覚えたことはなかった。
だからといって、魔性を甘く見ていたつもりはない。
ない、のだが……。
これは……この力は、想定していた圧力を大きく凌駕している。
古参の妖貴だからだろうか――何もかもが桁外れだ。
気を抜けば、瞬時にその場に膝をつきそうになる――だが、そうなったら最後だとも本能的に悟っていた。
負けられない。
ここで負けたら、何もかもがお終いなのだ。
だから、負けられない――膝などつけない。
若草色の双眸に意志を滾らせ、ぎっと相手を睨みつけた。
しかし相手は、リーヴシェランの眼差しなどお構いなしに問いかけてきた。

「囀る小鳥よ。囀ることしかできぬ小鳥よ。お前の今の言葉では、わたしは勿論、我が眷属の誰一人として説得することなどできまい。ただ待てというばかりのお前の言葉に……質もないお前の言葉に、いったい誰が従おうとすると思う？」

それとも、提示する質があるのか？

笑いながら問われたリーヴシェランは言葉に詰まる。

可能性なら、ある。

ラエスリールが目覚め、動き出したことだ。

だが、それを理由にすることはできないし、するつもりもない。

そんな――ラエスリール一人に全てを負わせることなどできるはずがない。けれど、彼女のこれからの行動が世界の命運にかかわるのも、確かなことで。

「……根拠は、あるわ」

答えたリーヴシェランに、闇の化身は嘲るように応じた。

「それは、金の……王蜜のご息女のご決断か？　かつて自らを人間だと信じておられたかの方のご温情に縋るが唯一の策か？」

それは何ともお粗末な――。

嘲る声が、リーヴシェランにははっきりと聞こえた。

聞こえたと、思った。

反射的に「違う！」と返したかった。

だが、できない。

漆黒の女性の指摘は鋭すぎたのだ。

もう少し円滑な指摘であったなら、あるいはリーヴシェランの心は耐えられなかったかもしれない。

「かの方に縋り、人間の未来をあの方に賭けるのか？　そのための時間つぶしのために、わたしを含む魔性に待てと告げるつもりか？」

追い打ちをかけるような言葉を受けた瞬間、胸に生まれた嵐のような感情をどう表現すればいいのか――リーヴシェランにはわからなかった。

ただ、反射的に浮かんだ言葉を口にせずにはいられなかった！

「冗談じゃないわ！　あのひとが頑張ってくれることなんか、あの人を知ってる者な

ら誰だってわかってるわ！　でも、それだけじゃあ、到底足りないこともわかってる！　わかってるからっ！　足掻いてるんじゃないの！」

ラエスリールが今、どんな状況にあるのか、リーヴシェランは知らない。

それでも、想像はつく。

目覚めたという彼女が、「人間の世界はもうお終い」だなんて、そんなことを言う相手に従うだなんて到底思えない。

彼女なら、全力で抗うはずだ。

悔しいのは、そんな彼女の側で、一緒に戦えないこの身だ。

「だけどっ！　できないことが何一つないだなんて思わない！　人間を滅ぼしたいだなんて、あの人は絶対に思わない！　それは私も同じことよ！　あなたの目にどれほど無駄な足掻きに見えようと、どれほど無様に見えようと、構いはしないわ！」

足掻くことは恥ではない。

どうしても譲れぬ一線があるのなら、足掻いて足掻いて、最後まで足掻いてもいいではないか。

それで譲れぬ大切なものが得られるのなら。
少なくとも、その可能性が得られるのなら！
「足掻いて、何が悪いの」
誇りを持って、リーヴシェランは言い切った。
「皆一緒に迎える……欲しい未来を勝ち取るためになら、何だってする。あなたにはただ絶るような行為にしか見えないのだとしても……！」
そうではないことを、少なくとも私は知っているのだから！
高らかに朗らかにそう宣言し、リーヴシェランは自らの琴の弦をかき鳴らした。
奪われた空間の支配を取り戻すために――。
揺るぎない決意を宿した琴の音は、すぐに世界を彼女の支配下へと戻したのである――。

2

心臓の全てを破妖刀に貫かれた妖鬼が、自らを倒した相手である人間を見つめながら最期の哄笑を上げる。

「無駄だ、無駄だ、無駄だ、無駄だ！　おれひとりを倒したところで、この流れが止まるものかよ！　お前たちは無駄な行為に命をすり減らしてるだけだ！」

猛禽の双眸を持ち、頭部から頸部にかけて羽毛に覆われた男が、自らの命の終焉さえものともせずに高らかに叫ぶ！

「断は下された！　お前らの未来は閉ざされた！　いくら足掻こうと、おれひとりを退けようと、次はすぐに現れる！　際限なく、お前らの相手は現れる！　おれでは無理だったが、おれの次にお前らを襲うやつは、お前たちを疲れさせるだろう……あわ

よくば、ひとりかふたりは片付けられるかもしれない。そいつが斃されたとしても、その次のやつはもっと大きな可能性を以てお前らと対峙するだろう！　いつまでも、いつまでもだ！　お前らに息つく暇など与えるものか！　人間など、次の世を待つまでもなく滅ぼしてやる……そのための一番の障害であるお前らを殺すためなら……」

おれらはいくらだって命をつぎ込んでやる！

強烈な憎悪をこめた叫びを上げながら、スラヴィエーラが操る破妖刀――夢晶結の切っ先に自ら心臓を……命の源を押しつけてくる！

ざしゅり、と肉を断ち切る感触がスラヴィエーラに伝わる。

同時に、魔性の命を啜り上げる破妖刀の本能によって、飛び込んできた魔性の命が吸い上げられるのも。

妖鬼の体だったものが砂塵のようにかき消える――まるで最初からこの場にいなかったかのように。

だが、スラヴィエーラは妖鬼がもたらした禍を目の当たりにしていた――消えた妖鬼をはじめとする複数の魔性によって、無残に滅ぼされた村を知っている。

喜ぶには苦すぎる勝利だった。

きり、と唇を噛みしめる彼女に声をかけたのは、同じチームを組む捕縛師だった。

全身に施された刺青から、『刺青のマイダード』の異名を持つ青年は、敢えて明るい声を上げた。

「……そっちも終わったみたいだな。こっちも何とか終わったぜ。いや、もう暴れてくれて封じるのが大変、大変。オルグァンのほうも片がついたようだし、ひとまずこれで一息つけそうで何より」

自分を気遣ってくれてのことだとはわかっていても、今のスラヴィエーラはいつものように彼の軽口を咎める気にもなれない。

抜き身の夢晶結を、思わず青年の喉元につきつけてしまうぐらいには、彼女は疲弊していた。

「スラヴィ！」

冗談にしては鋭すぎる動きに、オルグァンが咎める声を上げる。

「こいつが悪い」

一言で言い切った彼女に、マイダードがやれやれと肩をすくめた。
「あの惨状を見て、殺気立つのはわかるけどな、あんまりあれこれ考えこむなよ。もっと早く駆けつけていたらとか、考えても仕方のないことなんだから。少なくとも、これであの村の二の舞になる村はなくなったんだと、前向きに考えろ」
言いたいことはわかる。
村を滅ぼした魔性たちは葬った――少なくともあの妖鬼たちに蹂躙される『次の村』はなくなった。
だが。
「……そんなに容易く切り替えられるもんか」
凄まじいまでの血臭に包まれた村の様子は、脳裏にこびりついて離れない。
ただ無残に殺すことだけを目的とした魔性たちの殺戮に晒された村の住人たちは、心臓を奪われることさえなく、千々に引き裂かれていた。
ただのひとりも救えなかった。
その事実が、スラヴィエーラの心に重くのしかかっている。

そんな彼女に、マイダードが打って変わって厳しい声で告げた。

「難しくってもやるんだよ。これで打ち止めってわけじゃないんだから」

残酷な内容に、スラヴィエーラは思わず眉をひそめたが、反論はできなかった——彼女自身、イヤというほどに知っているからだ、彼の言葉が紛れもない真実であることを。

あの女皇の宣言から、二月ほどが経過している。

魔性による被害は拡大の一途をたどるばかりで、人間の数は激減したと見られている。見られている、というのは正確な調査が追いつかないからだ。

国が滅ぼされたという話は聞かないが、すでに小規模の街ならいくつも消えている——小さな村を含めれば、いったいどれほどの人間の命が摘み取られたか数えるのも恐ろしい。

「……わかってる。わかってるけどね……」

深い息を漏らしつつ、夢晶結を鞘に戻したスラヴィエーラは目を瞑った。

その先は口にしなかった——いや、できなかった。それを口にしてしまったら、よ

うやく支えている心が脆く崩れ落ちてしまいそうな気がして。
いったい、いつまで――。
どこまで、この惨劇は広がっていくのか。
終わりが見えない戦いは辛く苦しい。終わりが来るのかもわからないとあれば尚更だ。
諦めないと決めてはいるが、それでも先ほどのような光景を幾度となく目にすれば、せめて終わりの有無ぐらい知りたくなる。
だが、知ることに意味があるのかどうかもわからない。
あったとしても――それが果たして間に合うのか。
考えれば考えるだけ、心は重くなるばかりだ。だが、考えずにはいられない。そうして心が引きずられ、体までも重くなっていく気がする。
「……スラヴィ、少し休んでちょうだい。確認したけど、この近辺にはもう妖気は感じられないわ」
護り手である未羽の言葉に、しかしスラヴィエーラは頷けない。

未羽が信じられないのではない――休む前にしなければならないことがあるからだ。

「まだだよ、未羽。亡くなったひとたちを弔ってあげなければ……」

無残に殺された者たちの魂は、行き場を失う。

そう答えたスラヴィエーラに、オルグァンが頭を振りながら告げた。

「それはおれたちでやっておく。スラヴィ、お前は疲れすぎている。少しでもいいから体を休めるんだ」

労りに満ちた仲間の言葉を、スラヴィエーラはしかし受け入れない。

「体ばかり休めたって、心が休めないんだよ、オルグァン。眠っても見るのは悪夢ばかりで、逆に疲れるぐらいなんだ。それぐらいなら、たとえ気休めにすぎないとしても、あのひとたちを弔ってあげたいんだ」

そうしてようやく、泥のように眠れると思う。

見るのは変わらぬ悪夢だとしても、少しはましだと思えるのだ。名も知らぬ村人たちの墓を前に、決して諦めない心を確かめるために、その行為は必要なのだ。

折れそうになる心を立て直すために、死者への誓いを利用するようなものだ。卑怯

だとわかっていても、そうせずにはいられない……そうでもしなければ、とうに決意は挫かれていたに違いない……それほどに、たかだか二月ばかりで世界は変わってしまった。

夥しい数の死を目の当たりにした。

凄まじいばかりの魔性の怨嗟を受けた。

魔性たちの勝利を確信した未来への哄笑も。

それが、確実性の高いものだと理解せざるを得ないからこそ、スラヴィエーラの心は重くなるのだ。

人間という種を滅ぼす決定を下した女皇――その力を、スラヴィエーラは実際に肌で感じ取った。

気づく間もなくアーゼンターラの命を奪い、高らかに世界に宣言した漆黒の少女は、人間と同じ姿をしておりながら、全く異質の……否、次元の違う存在だった。

その少女に付き従うのは、これまで魔性の王とされてきた妖主たち。

さらに世界中の魔性たちが嬉々としてその言葉通りに踊るのだ。

世界は魔性のためにあり、人間など彼らの玩具でしかないのだと思い知らせるかのように——殺戮の宴は今も世界中で繰り広げられている。

決して諦めない、とは決めた。

その誓いはこの命ある限り破るわけにはいかない楔だ。

けれど、無残に散らされた命を目にするたび、己の無力を思い知らされる。

絶対的な記憶が、スラヴィエーラの心を縛るのだ。

カーヴィアの死闘——。

正確に言うなら、その果てに待っていた璃岩城における現実が。

なにもできなかった。

カーヴィアに派遣された自分は、紫紺の妖主を前にして、本当に、何もできなかったのだ——圧倒的な存在を前に、諦めないという心だけではどうしようもない現実を突きつけられた。命を捨てれば何とかなるという気休めすら浮かばなかった。

それほどに紫紺の妖主の存在は圧倒的だった。

諦めればカーヴィアの十万の民の命は失われる。

だから、必死に心だけは折られまいと思った。だが、そんな決意ぐらいで太刀打ちできる相手ではなかったのだ、妖主という存在は。

身を以て、知った。知ってしまった。

さらにその上に位置する存在まで知ってしまった身が、常に疑問を抱くのは当然の帰結というものだった。

どんなに必死に戦って、どんなに必死に勝利を勝ち取ったとしても、脳裏に浮かぶのは皮肉な自問だ。

『あの存在を前にして、この勝利に、いったいどんな意味がある？』

認めるわけにはいかない。

だが、どれほど禁じても浮かんでくる問いに、心は疲弊し続ける。

本当に、これは勝利と呼べるものだろうか――強大な相手の気まぐれにすぎないのではないのか、後に絶望を与えるためにわざと投げ与えられた疑似餌ではないのか。

答えは出ない。

出ないことまで含めての、女皇の仕掛けなのではないのか――。

スラヴィエーラは確かに疲れていた。心身とも疲労困憊の状況にあり、それゆえに疑心暗鬼の一歩手前まで追い詰められていた。

あらゆることが、女皇の策略に思われてならない。

どこまでが自分たち人間の努力で勝ち取ったものなのか、どこからが女皇の思惑に添ったものなのか——見極めることができない。

ターラ！　ターラ！　教えてくれ！

あの絶望的な状況で、どうやってあんたは動けたんだ？

ラエスリール！

人間全てへの死刑宣告に等しい宣言をなした強大すぎる相手を前に、どうしてあんたは迷わずに足を踏み出せたんだ？

できないのは、あたしが弱いからなのか？

それとも、あたしがまだ何か、わかっていないことをあんたたちが知っていたからか？

それなら、そこにたどり着ければ、あたしもあんたたちのように動けるのか？

スラヴィエーラは問いかける。
だが、その答えをくれる相手はいない。
アーゼンターラは浮城の氷室で眠ったままだし、ラエスリールの行方は知れぬままだ。
世界の命運を彼女たちふたりに託すのは間違っていると思う一方で、スラヴィエーラの心は「そうだ」と認識している。
残酷なことだ。
たったふたりの存在に、世界の命運を委ねてその結果を見極めるなど、残酷なだけでなく我が身の卑怯さに怖気さえ覚える。
だが――スラヴィエーラは我が身にできることとできぬことを識別する能力があった。
否、今は待つしかないことを知る判断力が。
結果、スラヴィエーラの意識はそれゆえに疲弊するのだ。
悪循環もいいところだった。

彼女の意識は休まることを知らず、絶望的な未来への確率の高さ故にささくれ立ち、過去の経験故に自責の念をより高まらせる。

……自滅への道を。

歩み始める。

あたしなんて――！

そんな想いがスラヴィエーラの意識を浸蝕しかけた時のことだ。

膨大な力を秘めた妖気の存在が露となったのは！

反射的にスラヴィエーラは夢晶結の柄に手を伸ばした。

妖気を感じ取った瞬間にでも、すぐさま破妖刀を繰り出す体勢をとった彼女の耳に飛び込んで来たのは――！

「スラヴィ！　マイダード！　オルグァン！」

チームを組む三人の名を、この上なく喜ばしげに、嬉しげに呼ぶ、なじみ深い少女の声、だった。

この声音を聞いた瞬間、浮かんだ期待とも希望ともつかぬ、心に灯った光は、次の

瞬間漆黒の少女が放った言葉故に、打ち消されることなく確定した。
「ターラが目覚めたわ！　あのひとが、ターラをわたしたちに還してくれたわ！」
終わりの見えない世界が終わった。
頑張っても頑張っても、意味はないのではないか――自分たちの動きは無駄な足掻きでしかないのではないか。
そう思っても、それしかできずに戦い続けてきた。
ぬぐい去れぬ疑念を胸に、それでも戦い続けてきた。それしかできないから。けれど、自分たちが目指す「終わり」が存在するかどうかもわからなくて……それどころか、そんなものは最初からないと言われるのが怖くて。
ただ闇雲に戦うことしかできなかった。
けれど。
スラヴィエーラは両目が燃えるように熱くなるのを感じた。
炎が燃えるように、熱い。
なのに、なぜか頬には濡れる感触があるのだ。

「あ、あ……」

声が漏れ出る。

そのまま堪えることなく溢れそうになるものの名を、スラヴィエーラは確かに知っていた。

その名は歓喜。

胸に抱いてもいいのだと許しを得た「希望」を手に、彼女は絶望の世界の終わりを確信したのである――。

3

カリ、カリ、カリ――堅い白木を小刀で削る音だけが、室内を支配する。

部屋にいるのは少女と少年のふたりだ。

ともによく似た容姿の主であることから、血のつながりは疑いようがない。

月光を紡いだような銀髪に、菫色の双眸を持つ、とびきりに整った顔立ちのふたりである。

数年前までは瓜二つであったろうふたりの姿は、もし第三者の存在があれば、眼福をもたらすものであったろう。同時に、その第三者は惜しむ心を抑えきれなかったに違いない。

なまじ酷似しているがゆえに、あまりにも痛々しく映る少年の顔半分を覆う火傷の

跡は、痛ましい過去を如実に物語っている。

だが、少年自身にそうした感傷はないのだろう――髪や装身具で隠そうとしないからだ。もっとも、人前に出る時は多少は隠しているのだが、それは人目を気にするというより、相手への気遣いからだということは、彼を知る者たちにとっては周知の事実だ。

そして、もうひとり――。

室内にいる少女は、現在寝台の住人だった。

それでいて、音をたてているのは少女のほうなのだ。

右手に小刀を持ち、白木を今はしゃりしゃりと削って、形を整えている。

それが一段落ついたら、今度は鑢で表面を滑らかにする作業に移る。

さらにその後、より小さな細工用の小刀で白木の表面に螺旋の溝を彫り上げることを知っている少年は、少女が造形を終えたらしいと判断したところで声をかけた。

「ターラ、一旦休憩にしよう。ちょうど、生姜茶を淹れたんだ」

作業に夢中になっていた寝台上の少女が、いかにも残念そうに息をついた。

声をかけてきた少年が、もちろんわざとこのタイミングで茶を用意して声をかけてきたことを知っているからだ。

「……トーン」

名を呼ぶ声に、懇願めいた響きが宿る。

だが、少年はそんな少女の言外の「お願い」を聞くつもりはなかった。

少女が仮死の眠りから目覚めて数日――たったそれだけの時間の中でも、学ばざるを得なかったことがあったからだ。

『トーン、お願いよ、もう少しだけ』

『もうちょっとだけ待って、お願いよ、トーン』

『あと少しなの、お願い』

作業を中止させるたびに、必ず少女が口にする『お願い』に、ついほだされた結果というものに、トーンことリメラトーンは心底こりごりしていたのだ。

何がこりごりなのかと言えば、「おねだり」を聞いた結果の少女の容態悪化とそれに伴う彼女の側に控える漆黒の少女からの報復だ。

ターラ――アーゼンターラの「お願い」に弱いのは自分もその少女も同じである。すがるように見つめられて「お願い」されて、自分も少女もそれに逆らえた試しなどない。

そうだというのに、仮死状態から覚めて間もないアーゼンターラの「お願い」に逆らえなかった結果の悉くを――つまりは漆黒の少女蜜里の責任もあることまで含めて――あの少女は「あなたのせいよ！」と決めつけてくれたわけである。

『ターラが夢中になったら、自分の体調なんて顧みない性格だってことぐらい、あなただって知ってるでしょう⁉』

一月以上にわたる仮死状態にあった少女が最初に無理をした時の責任は、確かに自分の負い目が原因だった自覚はある。

『トーン、トーン、そばにいて……』

彼岸から舞い戻ってくれた年子の姉の願いに素直に頷いた自分が間違っていたとは思わない――なぜか、昔から常に一緒にいた漆黒の少女を除いて、ふたりきりになりたいと言い出した時には微かな違和感を覚えたものの、それは自分と少女との、アー

ゼンターラには気取らせぬようにしてきた確執に気づいてのことかと思ったのだ。
そう、リメラトーンと蜜里は、実のところ仲が良くない。
アーゼンターラの一番近くにいるのは自分だと、両者譲る気がないからだ。
過去のことがあって、屈折した想いを抱いたこともあったけれど、リメラトーンにとってアーゼンターラはたったひとりの家族で、誰より近しい存在だった。憎しみを媒介としても、その事実だけは揺るがなかった。
今、素直に向き合うことができるようになって、改めて思うのは、「憎悪は愛情の裏返しである」という古今使い回された言葉は、真理であるが故に生き残ってきたのだろうということだ。
純粋に愛するだけでいられない事態に直面した時、人はどうするのか。
愛を捨てるのか。
できなければどうするのか。
捨てることはできない。だが、同じモノを持ち続けることはできない。
ならば、どうするのか。

似たもの、あるいは全く違って見えても本質は酷似した何かにすり替えるしかないではないか。

愛と憎悪は真逆（まぎゃく）だと言われる。

だが、本当にそうだろうか。

相手のことを心底想い、相手の喜び、悲しみを知りたいと想う。

そうして、自分が望む感情を相手に与えようとする。

愛情ならば、無事と幸せを。

憎悪ならば、悲運と絶望を。

それは真逆ではない——コインの表裏にこそ近しいものだ。

譲れぬこだわりを捨てきれぬからこそ生じ得るものなのだ。

今では、わかる。

それまで、わからなかった。

無限に溢（あふ）れるアーゼンターラへの呪（のろ）いにも等しい憎悪の根源にあったものの正体が。

強すぎる憎悪は、裏返された同質同量の愛情だった。

悟ったときの、脱力感は記憶に新しい……自分はとことん姉に弱いのだと思い知らされたからである。

そんな姉とふたりきりになった時、彼女の意外な「お願い」を聞いたのが、そもそもの元凶だった。

『お願いがあるの、トーン。白木と、それを加工するための切れの良い小刀がほしいの』

ほんの二月前、それまで魔性側についていた自分に頼むには似つかわしくないその内容に、リメラトーンが躊躇したのは言うまでもない。

一応浮城側に受け入れられたとはいえ、その本心が奈辺にあるか、悟れぬほどに彼も愚かではない。かつて『女皇』の下にあった人間――いくら本人が否定しても、未だその影響下にある可能性は否定できない。

本人に自覚はなくとも、なにがしかの仕掛けをほどこされていてもおかしくはない。

そんな問題だらけのリメラトーンを浮城が受け入れたのは、間近で監視するためだ。

アーゼンターラの弟だからという温情だけで下された決定ではない。

……そんな自分に、どうしてアーゼンターラは欲しいものの調達を頼むのか。もしかして、数年前まで瓜二つだったこの姉は、そんな簡単なことさえわかっていないのだろうか、と……もっとはっきり言えば「馬鹿なのか？」とさえ思った。さすがに口には出さなかったが。

「ターラ、そういうことなら、ぼくじゃなくて蜜里に頼むべきだよ」

要注意人物指定を受けているに違いない自分より、蜜里のほうが容易くその望みを叶えてくれるはずだと指摘した彼に、彼女は「駄目なの」と頭を振った。

「わたし、前の戦いで、手持ちの螺旋杖を使い果たしてしまったのよ。新しい杖を作りたいの……でも、蜜里はそのことに反対してるの。今は体を本調子に戻すのが先決だからって」

蜜里の言い分は正論過ぎるぐらいに正論だったから、リメラトーンはその旨を姉に伝えた。

「それはそうだろ？」

今は回復に全力を尽くすべきだ——本当は、二度と魔性との戦いなどに身を投じて

欲しくないと思ってはいるが、それはアーゼンターラには無理な注文だともわかっているから、そうとしか言いようがなかった。

だが、次に放たれた姉の言葉に、リメラトーンは息を呑んだのだ。

「わたしのせいで、人間が滅ぼされそうになっているのに？」

菫色の瞳の奥に、深い慟哭を潜ませた少女の問いかけに、彼は言葉を失った。

「ターラ！」

「操られた結果だとしても、誘導された結果だとしても、紛れもなくわたしが生み出した『鍵』を使って、女皇は世界を滅ぼそうとしているのよ。それなのに、元凶のわたしが何もしないでいるだなんて……！」

純銀の輝きを放つ睫に縁取られた大きなふたつの瞳から、ぼろぼろ、ぼろぼろと大粒の涙が溢れ出すのを、リメラトーンは呆然と見つめた。

「ち、違う……それは違うだろう、ターラ！　それを言うなら、最初に女皇を生み出したのは……破壊の鍵を世界に顕現させたのは……っ！」

ラエスリールという、あの破妖剣士だろう！

責を問われるなら、それは彼女であるべきだ！

叫んだリメラトーンに、アーゼンターラが答えた。

「あのひとは、わたしを助けてくれた……一度ならず、二度までも。そうして、今も戦っているのよ。死んでいた間のことは、本当によく覚えていないんだけど、それでも感じることはあって……あのひとは、絶対に戦いたくないひとと、それでも戦ってくれたの。戦いたくないと泣き叫びながら、それでも戦ってくれたの。そのおかげで、わたしはここに戻って来れた。わたしは、あのひとに少しでも恩を返したいの」

迸るようなアーゼンターラの言葉に、リメラトーンは咄嗟に言葉が出なかった。

「……ターラが、妖主と渡り合えたのは、雛の君が……今は女皇の彼女が、ターラに破壊の鍵を生ませたかったからで、きっとこれからどんなに頑張っても、ターラはもう、あんなに強くはなれないと思うよ」

それでもそう告げたのは、せめてもの抵抗だ。

二度と、紫紺の妖主を斃した時のような力は姉には宿らない。我が身を犠牲にしても、人間の辿る絶望的な未来を覆す絶対的な力はないのだと告げるのは残酷なことだ

と知りながら、それでも告げずにおれなかったのは――。

諦めて欲しいと思ったからだ。

リメラトーンはすでに、女皇のもたらす新しい世界を諦念とともに受け入れていた。

自分は死ぬだろう。アーゼンターラも死ぬだろう。浮城の住人のことごとく。

人間という種に生まれた者たちは死に絶えるだろう。

だが。

人間最後の死者がアーゼンターラであることは望まない。だから、足掻かないで欲しいと思った。もしかしたら、蜜里も同じ気持ちなのではないだろうか。

終わりが約束されたこの世界で、せめて最後まで笑っていて欲しい――。

そんな彼の怯懦を、アーゼンターラは鮮やかにはね除けた。

「それが、何なの？」

彼女は強すぎる輝きを放つ菫色の瞳で問いかけてきた。

「わたしは道化だった。全部、女皇がお膳立てした舞台の上で踊るだけの道化だった。人間を滅ぼすための鍵を生み出すためだけの傀儡に選ばれたのがわたしなのだとして

も、用がすんだからって放り出されたって、わたしがわたしであることまで、女皇とやらに指図される筋合いはないわ。わたしはわたしであることを、最後まで投げ出さないと決めたの」

決然たる宣言。

リメラトーンが本当の意味で、姉に敗北を認めたのはこの瞬間かもしれなかった。

「……無駄なのに？」

「無駄かどうかは試してみなければわからないわ」

「無駄に決まってるじゃないか！」

「そんなこと、誰が決めたの？　トーン、トーン、その気持ちはよくわかるわ。わたしも同じだったから、とてもよくわかる。諦めるのはとても簡単だってことは。でも、わたしの周りのひとはみんな、とっても諦めが悪い人たちなんだってわかったら、自分が格好悪く思えて、それはイヤだと思ったの」

スラヴィもマイダードもオルグァンも……みんな。

きっと、この状況にあっても――。

「誰がなんと言っても、元凶の片割れであるわたしが舞台から降りたりしたら、それこそ格好悪すぎるじゃない」

だから、わたしはわたしにできることをするの。

言い切った彼女の強い眼差しに、結局リメラトーンは逆らえなかった。

螺旋杖作成のための材料と道具を代理申請したところ、拍子抜けするほどあっさりと通ったことに驚きは禁じ得なかったものの――。

なぜ、蜜里を通さずに自分を口説いたのか――アーゼンターラの真意を知った時には、さすがに殺意を覚えたものだ。

リメラトーンは知った――姉の本性とも呼ぶべき部分を。

彼女は自身が貫くと決めたことのためなら方法を選ばない人間だったのだ！

蜜里を口説くことに失敗した結果、リメラトーンを口説いて螺旋杖作成に必要な材料を手に入れた彼女は、正しく誰の言うこともきかない「螺旋杖」制作の鬼と化し、

「だから、材料を与えないようにしてたのにーっっ」という蜜里の叫びで、ようやく事の次第を悟ったリメラトーンは――その前に、盛大な蜜里の八つ当たりを受けた少

年は。

ある意味、これまで以上に漆黒の少女の風当たりの強い位置配置を、実の姉によってなされたことを確信せざるを得なかったのである。

「トーンの馬鹿、馬鹿、馬鹿ーっ！」

漆黒の少女の八つ当たりを受けながら、リメラトーンは遅まきながら思い出していた。

嗚呼、そういえば、アーゼンターラはいつだって、こうだったな、と。

いつだって、自分のやりたいことを行使するためには、周囲の者の意識など置いてきぼりで……でも、いつだって最終的には納得するしかない形で収めてしまうのだ。

卑怯だと思う。

どんな裏技だと思う。

教えてくれれば、自分なら、もっと有効的に活用できるとも思ったものだが……きっと、それは違うのだろう。

どこがどう違うのかはわからないが、『特別』な存在というのは、きっとこの世界

に存在するのだろうと思った。
アーゼンターラを特別だとは思わない。
本当に特別に感じる存在を知っているから、尚更(なおさら)そうは思わない。
けれど。
アーゼンターラの仲間たちの必死の努力や、アーゼンターラのできる限りの努力が実を結べばいい、とリメラトーンは思う。
それがどれほどに儚(はかな)い希望の先にしかないものだとしても――。

第四十九章　秘められた意図

1

虚空に浮かぶ女皇の真球の居城――。

その広間には重すぎる沈黙が横たわっていた。

思いがけぬ王蜜の妖主の言葉に始まった舞台を前に、その場に居合わせた者のうち、当事者を除く皆が声を失っていた。

女皇に膝を折ったはずの妖主のひとりが、よりにもよって、新たに認められた『女皇』候補の前に堂々と跪いたのだ。

語る内容は、男の性格を物語る身勝手極まりないもので、告げられた当人などは途中で泣きそうな顔になっていたぐらいだが――それでも、その場に集う者たちには、わかった。

理解せざるを得なかった。
悪態まじりの――というか、ほとんどがそれに占められた深紅の妖主の紡ぐ言葉が、正しく彼の本心から放たれたものであることを！
出会った瞬間に魅了され、己の本質とも呼ぶべき真名すら書き換えられた男は、強い反発を覚えながらも、ついにはその相手の前に膝をついたのだ。
深紅の魔王は告げた。
『我が女皇……我を我が本質たる真名ごと塗り替え、己ひとりのものとした絶対にして恐ろしき支配者よ』
と――。
その意味するところは大きすぎる。
戯れにすら見える行為に、言葉を告げられた当人は当惑と疑念を露に男を見つめている――無理もない、裏切りの性を持つ男の、殊更大仰に捧げる言葉だ。
真に受ければ馬鹿を見ると疑って当然のものだ。
だが、その裏にあるものを、見抜けぬ者はこの場にはいない――否、周囲が驚愕に

凍りつくほどの、稀有なる誓いを捧げられた当人だけは、意味をわかっていないかもしれないが、それ以外の全員が、その言葉の重すぎる意味を悟っていた。

裏切りの王、真逆の王。

自身にすら把握できぬ自らを持てあまし、それでいてどこまでも自由を愛し、束縛を嫌い、憎んだ深紅の魔王の宣言は、その場の誰もすぐには信じられぬほど……それでいて、その場の誰もが悟らずにおれぬほど、彼の心からの真実だったのだ。

途中で言葉を砕けさせ、ふざけた口調に戻ったものの、告げる内容に乗せられた男の決意と想いの『重さ』は、まさに自らの存在そのものを重ねたものだった。

女皇は、その事実に衝撃を受けた。

一度自らに進んで膝を折った男の背信に対するものではない。

一度として相手の忠信を信じたこともない相手の裏切り行為に揺らぐような心は持たない。

驚いたのは、自分はもちろん、他のいかなる存在に対しても、決して真実の意味で膝を折ることはないだろうと思った男を跪かせる者がいたということだ。

先ほど彼女の実父たる王蜜の妖主が告げた通り、自分と同じ『女皇』の資格を認められた相手は、どこまでも不正規に生じた存在だ。

『その者は、最後に無力に生まれたモノ』

女皇の資格として、彼女が生来持ち得た条件はこれだけだった。

五要を従え、破壊の鍵を手に入れたことも、数奇な巡り合わせとしか言いようがなく、結果的に資格を得ただけだ。

いや、途中からは明らかに深紅の魔王の意図が加わったに違いないが、そうであるならば、彼女は作為によって生み出された女皇候補ということになる――自分が破壊の鍵を手に入れるために、アーゼンターラという名の少女の運命を操ったように。

自分で作り上げた存在に、深紅の魔王が跪くなど到底信じられない――だが、男の本気は疑いようがなく伝わってくる。

ならば……考えられるのは――。

最初に屈したからこそ、男は彼女を女皇資格保持者に仕立て上げようとしたということだ。

何者にも屈することをよしとせぬ男にとって、この上ない屈辱と感じる心を抑え込むためには、相手には最低それだけの資格がなければ許せなかったのかもしれない——妖主の娘であるというだけでは、彼にとっては不十分だったのか。

なんたる身勝手、なんたる傲慢。

だが、そう考えればしっくりくるのは確かだ……選ばれたラエスリールにとっては迷惑この上なかろうが。

「……わかってはいたけれど、思った以上に最低な男だこと。あなたの自己満足のために、彼女に望んでもいない立場を押しつけるだなんて」

確信とともに、女皇は告げた。

ラエスリール——確かに、自分と同じ資格を持つ女性は、先ほどからの展開に明らかについていけていない。彼女は何も知らなかったのだ。そうである彼女が、自ら世界の頂点に立つことを望んだはずがない。

男の身勝手で、御輿に担ぎ上げられた哀れな娘——そう考えると、先ほど覚えた興奮がいささか冷める。

初めて得た対等な存在だと思ったからこその歓喜だったというのに、訳もわからず祭り上げられただけの人形だとは……興ざめも甚だしい。

とはいえ、それでも貴重な存在であることに違いはない。ならば、引き裂く楽しみぐらいは味わわせてもらわなければもったいない。

ちろり、と唇を舐めながら、女皇はラエスリールを見つめる。

と、その視線に気づいたように、柘榴の妖主がくつり、と喉を鳴らした。

「正しく女皇となるべく生まれ落ちたお方、あなたは何か勘違いしていらっしゃる」

低く耳をくすぐる美声が、音楽のような言葉を奏でる。

だが、誠意を伴わぬ慇懃無礼な語り口には、嫌悪しか覚えない。

「勘違いですって？　わたしが何を誤解しているとおっしゃるのかしら、二の君」

冷ややかに問いかけると、男はそれは嬉しそうに笑った。

「あなたはおれがこいつの意志などお構いなしに、この舞台に引っ張り出したと思ってらっしゃるようだが、それは違うということですよ。こいつが望むから、おれはこいつのためだけに舞台を調えてやったんです」

深紅の瞳を煌めかせながら告げられる言葉は、しかし到底納得できるものではない。

「それにしては、そこの彼女は驚いているようだけれど？　彼女が望んだというのなら、それはおかしなことでしょう？」

白々しい男の言い分を鼻で笑う。

だが――。

「少しもおかしくなんかありませんとも。こいつは、自分の望みを叶えるために、何が必要か知らなかっただけですからね――ラス」

男は傍らの相手に向かってにやりと笑った。

「お前の望みはこの世界と人間の存続だ、そうだな？」

まだ展開についていけない様子の破妖剣士が、それでもこくりと頷いた。

「そうだ。人間のいない新世界など望まない」

「ならば、お前は世界の皇となるしかないぞ。あちらが皇となれば、お前の望みは叶わない……この世界の行く末を決められるのは、この世界が認めた皇だけだからな。そして、皇には他の何者も敵わない。そもそも、滅するための戦いを仕掛けることさ

えできない。同じ資格を持つ者しか、刃を向けることさえできないよう、世界が定めているからな。だから、お前に同じ資格を持たせるしかなかった――わかったか？」

男の言葉に、ラエスリールが息を呑む。

女皇は呆れた。

どうやら男の言葉通り、自分は勘違いをしていたらしい――男は正しくラエスリールの望みを果たさせるために手を尽くしたのだ。

だが、この段階に至るまで、相手に何も知らせていなかったというのはどうなのか。途中で相手の覚悟を尋ねるなりなんなりしようともしなかったとは呆れ果てるしかないではないか。

なんて、間抜けなの。

舞台に上がってから台本を渡される役者など聞いたこともない。男が身勝手であることだけは間違いないが、ラエスリールがとことん鈍いのも紛れもない事実だろう。

けれど、と女皇は思った。

そういうことなら歓迎だわ、と。

中身の伴わない人形など、対等な相手とは認められない——だが、無自覚であれ、譲れぬ覚悟を胸に抱いた相手なら。

世界を賭けて、戦う価値もあるというものだ。

一度冷めたはずの熱が、じわりと胸の奥で広がっていく。

女皇は、この場にいる他のふたりに目を移した。

「どうやら、二の君はあちら側につくことを決めたようだけれど、あなた方はどうなのかしら？」

率直な問いに、王蜜の妖主もまた躊躇いなく答えた。

「御身の目覚めとともに、馳せ参じましたことを悔いたことなどございません」

それは、娘ではなく自分につくということか。

頑固な気性の王は、どこまでも自らの掟に忠実であることを選ぶつもりらしい。

そして、もうひとり——白焔の妖主は。

「妾も、自ら立てた誓いを破るほど、誇りを捨てるつもりはありませぬ」

こちらも生真面目な性格の彼女らしい答えだ。

「では、世界の行く末とやらのために、そろそろ始めたいのだけれど――」
ラエスリールに目をやり、彼女は尋ねた。
「あなたの得物はその破妖刀でいいのかしら？」
色違いの双眸が、ちらりと真紅の刀身に向けられる。
声なき声がその名を呼ぶと、刀身が答えるように震えた。
「ああ」
頷く姿には、先ほどまでは微塵も見えなかった強い意志の光があった。
そうでなくては。
にこりと笑い、女皇は自らの右手を何もない空間に伸ばした。
同時に現れる、漆黒の大剣――彼女の力を結晶化した彼女自身でもあるそれを手に、彼女は戦いの始まりを宣言した。
「では、始めましょう」
そうして、静かに、戦いは始まった――。

2

ラエスリールは困惑していた。

父の発言に始まり、取り戻すと決めていた男の、あまりに酷い発言の数々――その果ての、信じられない彼の行動。

何もかもが想像の埒外で、どういうことなのか認識が追いつかない。

目まぐるしすぎる展開に、頭がついていかない。

もしかして、自分はいいように男の掌で踊らされていただけなのだろうか――とまで思った時、まさにそれを指摘する少女の声が響いた。

息を呑んだ。

男なら、それは充分にあり得ると思ってしまったからだ。

先ほど胸を満たした充足感が、萎んでいくのを感じた。彼女は男の裏切りに慣れすぎていて、新たなその可能性を否定できなかったのだ。

だが――。

男が漆黒の少女の問いに答える言葉を耳にした時、まやかしではあり得ない、男の本心からの言葉を聞いたと感じた。

男が紡ぐ言葉と重なって、違う声が聞こえたような気がしたのだ。

『お前はもう、人間も世界も要らないとは思ってないだろう？』

確信を孕んだそれは、声どころか彼女だけに聞かせるための思いですらなかった。

そう言われているような気がする、それだけのものだ。

なのに、それが間違いなく男から放たれた言葉だと信じられて、ラエスリールは大きく目を瞠った。

言葉でなく、心話でもなく、ただ伝わってくる「そんな気がする」だけの波動は、悔しいほどに自分の心を見抜いたものだった。

『絶望の淵に沈み、自分を欲さぬ世界なら要らないと、全部放り出そうとしたあの夜

のお前は、もういないだろう？』

十二の夜。

引き取ってくれていた一家に騙されて、妖鬼への贄として差し出されたあの夜。

胸を覆った絶望と苦痛。

誰も自分を必要としない。誰も自分を欲してくれない。

世界が自分を要らないというのなら、そんな世界なら、自分も要らない。

絶望に駆られて、世界ごと滅ぶことを望んだ——幼く未熟すぎた自分。

今振り返ってもぞっとする、強大な嵐を無自覚に巻き起こした無知な子供。

あの夜、自分の前に訪れたのが他の誰かであったなら、世界と自分——双方が無事で済んだ確率はいかほどだったか。

たとえば……あの時現れたのが父であったなら、まず間違いなく父は自分を処断したに違いない。世界の存続を危うくさせる危険な芽を、自分の娘だからという理由で、父が見逃すはずがない。

そして、それは他の妖主にしても同じことが言えるだろう。

世界を支える要石――五要たる者、世界を滅ぼそうとしている自分を、殺さずに済ませることなど考えもしなかったに違いない。

あの夜、自分の下へ真っ先に駆けつけたのが闇主でなかったら、間違いなく自分の命はそこで終わっていたのだ。

気まぐれな男――だが、五要としての務めはその身に刻まれていたはずだ。

一刻も早く世界を破壊に導く存在を除去すべきだと、内なる声は告げたに違いない――それでも男は、そうはしなかった。

殺す代わりに、声をかけた。

笑いながら、提案してきた。

『なら、おれがずっとそばにいてやるよ』

と。

絶望と孤独に追い詰められて、世界ごと心中しようとしていた自分の胸に真っ直ぐに届く言葉で。

男にとっては戯れの延長に過ぎぬ言葉だったのかもしれない。自らに本気などある

と信じていない男が、自分の言動をどう考えているかなどわかりはしない。
だが、その一言に——確かにあの夜の自分は信じられる何かを感じたのだ。
それゆえに、破壊するために放たれた力は収束した。
未熟で無知な子供だったから、男の口先だけの優しさに騙されたのに違いないと、記憶を取り戻してからずっとそう思っていた。
けれど、それは違う。
違っていた。
今となって、はっきりとわかる。
あの夜のあの言葉には、先ほどから感じる男の波動が宿っていた。
もしかしたら、男自身も把握できていない、揺らぐ心のもっと奥底の、男の核とでも呼ぶべき場所から放たれた響きが、あの言葉には生きていたのだ。
だからこそ、自分はあの嵐のような力の暴走を止めたのだ。
信じるに足る何かを彼のなかに見出したからこそ——。
もっとも、その直後自分の記憶に操作を施し、姿を消した男の判断には大いにもの

申したいところである。

ずっと側にいると言った舌の根も乾かないうちにさっさと姿を消し、挙句数年放りっぱなしというのはどうなのかと思う。

セスランに自分を保護させ、浮城に引き取らせ、折を見て姿を現すなど、手抜きもいいところではないか。

だが、そうでなかった時のことを想像すれば、それが男の気まぐれゆえの選択だったのだとしても、結果的には正しかったと思わざるを得ないのだ。

当時もし、男がとことん暇で、気まぐれに見つけた自分に告げた言葉を実行したとしたら――それは。

母であるチェリクと同じ――否、それ以上に人間から隔絶された生を歩む道しかなかったことを意味する。

父である王蜜の妖主に、意識を黄玉に封じられている時、チェリクが部分的に解放してくれた時、ラエスリールは母の過去にも触れた。

以前、空っぽだった母の器に宿った時とは違い、母の意識が宿る肉体に借宿してい

たら、見るともなく過去が見えたのだ。

そこには、自分の知らない母の姿があった。

憎しみに駆られ、自らの立ち位置を違えることさえ躊躇わぬ復讐者。

人間ではなく、魔性に寄り添う心に近い傲慢な子供。

苦心しながら人間側に添おうとする心。

自分がもし、同じ立場で……そうしてあの深紅の男が約束通り「ずっと側にいてくれた」なら……この心は、今この時、どう動いたかわからない。

セスランに保護され、マンスラムの庇護を受け、浮城で一応の居場所をもらった。

心を閉ざして、殻にこもった自分に絶えず声をかけてくれたのはサティンだった。

そうやって、自分の世界は広がった。

振り返れば、遅々たる歩みにすぎなかったけれど、それでも世界は広がったのだ。

男の気まぐれが偶然引き起こした恩恵と言えば言えるかもしれないが、もしかしたらそうではないかもしれない、と今のラエスリールは感じている。

もしかしたら、男はそこまで見抜いていたのではないかということだ。

常に揺れ動き、自らの有様すら顧みない表面上の男ではなく、男自身把握できない、男も知らない奥底にいる男が、それを選んだのだとしたら。

それはいったい、どんな意味を持つのだろう？

だが、そこまでだ。

ラエスリールの追及は、その先にはたどり着けない。

いや、たどり着く必要性を感じないのだ。

男の真意がどうであれ、結果的に自分が男に誘導される形で生きてきたのだとしても、その時その時の選択を為したのは紛れもなく自分自身であることを知るからだ。

人間にも魔性にも傷つけられた。

人間にも魔性にも癒された。

人間にも魔性にも騙され、人間にも魔性にも信じるに足るものを見つけた。

それは、自分で摑み取ってきたものだ——男に手渡されたものを唯々諾々と受け取ったわけではない。

ならば、男の作為がどうであれ、迷う必要などありはしない。

男の言う通り、今の自分が望む未来を勝ち取るために、戦うことを決めたのだから！

始めましょう、と女皇が言う。

ラエスリールは紅蓮姫を握る指に力をこめ、はっきりと頷いた。

「ああ。始めよう」

※

真紅と漆黒の刀身がぶつかりあう！

甲高い悲鳴にも似た音が空間を震わせると同時に、ぶつかりあった力の欠片が周囲に散った。

両者、退くことはない。

再度、刃はぶつかりあう。

空間が軋みを上げる——ふたりの女皇候補の戦いに、空間そのものが悲鳴を上げる。

先にその事実に懸念を抱いたのは、漆黒の少女のほうだった。
不正規に得たとはいえ、五要が認めた皇候補同士の戦いに、自分のための絶対の空間が揺らいでいる。
どうしたものか。
迷ったのは、しかし一瞬だ。
構うものではないと思った。
かろうじて資格を得た相手の力は、やはり自分のそれより遙かに劣る。瞬間的な力こそ拮抗しているが、それもすぐに終わることだ。
もともと有する力が違う。
ラエスリールが自分と対等に渡り合えるのは、せいぜいあと数合だ――互いの肉体に夥しい傷を与え合う戦いにおいて、消耗する分は彼女のほうが圧倒的に大きい。
数えたこともないほどの命を抱える自分と、最早ただひとつしか命を持たないラエスリールでは、持久力の面で彼我の差がある。
押し切ってやろう。

圧倒的な力の差を見せつけての勝利こそが、この後の自分の力となる。
自分こそが絶対の世界の主なのだと、この世界全てに示してこそ、意味がある。
そうすれば、敗者に与した柘榴の妖主の影響力は甚だしく減退する。
かの妖主は、口惜しいが新たな世界を生み出すための『要』として必要だ。
すでにふたつの『要』が失われた今、これ以上世界を支える柱の喪失は認められない。新たな『要石』となり得る存在はいることはいるが、取り込むには多少の時間と手間を要する。
その時間を稼ぐためにも、彼はまだ喪えない。
なればこそ、急ぎ決着をつける必要がある。
ほんの数合で決着をつけることによって、深紅の魔王の決断がいかに愚かしいものであったのか、本人と世界に突きつけるのだ。
一合手を合わせただけで、確信した。
もともとの力が違う。
自分がラエスリールに負けるはずがない。

だが、自分が不要と断じた人間の存続を賭けて、戦いを挑んでくる相手だ。全力を尽くすのが礼儀というものだろう。

だから、早急に勝負を決める。

自分の楽しみのために、だらだらと戦いを長引かせるのは、彼女を嬲る行為にしかならず、それは彼女を貶める行為だ。

そもそも正当な資格を持たぬ彼女をこの場に送り出すためだけに、柘榴の妖主がどれほどの無理と無茶を重ねてきたのかが見えるようだ。

男が彼女の無茶な願いに真摯に向き合ってきたというのは、もしかしたら頷いてもいいかもしれない。

彼女の願いを叶えるために、無茶に無茶を重ねたということも。

だが、そうだとすれば――男は彼女の有限に過ぎる命を、あまりにも過酷な状況に放り込んできたとも言えるのだ。

ラエスリールのただひとつ残された命には、恐らくかつての漲っていたであろう力は残されていない。

ここまでたどり着くまでに、彼女の命はそのほとんどを燃やしつくしてしまったのだ。

今あるのはかき集めた残滓のようなもの。

そんなもので、自分と対等に渡り合えるはずがない。

彼女がどれほどに必死になろうが、集められる力はすでに使い果たしているのだ。

それでも彼女が戦いを決意したのは意地か、無知か。

決して退けないという意地か、あるいは自身がそんな状況にあることも理解できなかった無知ゆえか。

だが、そんなことは勝負の上で理由になどならない。

女皇は、自らの完璧な勝利を以て、そのことを世界に示すことを躊躇わなかった。

漆黒の大剣を揮い、彼女は真の世界の皇たる事実を示す。

「これで終いよ！」

下手な手加減は、仮にも同じ資格を持たされた相手への失礼となろう。

そう思えばこそ、女皇は全力でもって、刃を振り下ろす。

それは、直後、ラエスリールが手にする真紅の破妖刀を両断すると同時に、彼女の心臓までも断ち切る一撃となるはずだった。
女皇はそのつもりだった。
だが――。
どんな運命の悪戯か、あるいはいかなる誤算があったのか。
それは現実とはならなかった。
満身創痍の状態にあり、肩で息をつきながら――。
女皇の一撃をしっかりと受け止めたラエスリールは、血まみれの姿でありながら、得心がいったように「なるほど」と声を漏らしたのである。
完全にして完璧なる自らの勝利を確信する女皇にとって、それは想定外のことだった。
何が起こったというのか。
女皇は一瞬、理解できなかった――。

※

おかしい。

違和感を覚えた。

しかし、ラエスリールにはそれが何に起因するものなのかがわからなかった。

甲高い音を立ててぶつかり合う紅蓮姫と女皇の漆黒の大剣。

互いの力が正面からぶつかり合って、千々に砕けた互いの力が世界に散り、そうして互いを傷つけ合う。

ざしゅり、ざしゅりと皮膚が切り裂かれる。

女皇の放った力は、ほんの一撃でラエスリールの全身に無数の傷を走らせた。

だが、そんなことで闘志を鈍らせる彼女ではない。

勝機などないと言われた戦いは、彼女にとって珍しいものではない。初めて戦いの舞台に立った時から、そればかりだった。

護り手もなく妖貴との戦いを強いられた初戦から、彼女は常に敗北が——少なくと

も自分を除く他者に――約束された戦いしか用意されてこなかった。
闇主が来てくれて、絶望的な戦いは少しはましになったけれど、それでもいつだって彼がそばにいてくれたわけではなく、その度にぼろぼろになった。
ぼろぼろになって、けれど何とか凌いできた。
それは――その理由は。
いつも、ラエスリールの傍らに紅蓮姫が――真紅の破妖刀があったからだ。
大食漢にして美食家――一見相反する「食」へのこだわりを示す破妖刀は、実に扱いにくく厄介な相棒だった。
彼女が認める「ご馳走」たる上級魔性を前にしたら、「ご馳走、ご馳走、美味しそう！」と、一刻も早く食べるために暴走し、食指が動かぬ下級魔性を前にすれば「あんまり美味しくなさそう」もしくは「不味そう」と主張して、ちっとも動いてくれなかったりした。
その度に、乗り気でない破妖刀を叱咤するのはラエスリールの役目だった。
次に美味いのをやるから、今はこれを食え。

我慢してでも力をつけないと、極上のご馳走を前にしても何もできないぞ、それがイヤなら力を蓄えろ。

等々。

どれほど気が進まない破妖刀をその気にさせるために苦労したことか！

だが、今この時、ラエスリールの脳裏に甦ったのは、どれほど叱咤激励しても、紅蓮姫が絶対に頷かなかった事例だった。

あれは、璃岩城でのことだった。

父の姿を纏った芝牙尖を前にした時のことだ。

同じ拒絶を彼女は示した。

食べられないと——どうしても、流れ込んでくる命と同化できないと。

それは、芝牙尖こと侍黄が一度死した身であったからだと思った。

一度冥の海に落ちた魂が舞い戻ったことで、この世にあらざる闇を纏った命は破妖刀にも啜れないのだと、だから紅蓮姫が叫んだのだと思った。

だが、そうではないのだとしたら。

彼岸から舞い戻った命ではなく、彼岸から拾い上げた者の力にこそ、紅蓮姫の本来の力が発揮できないというのであれば――？

辻褄はあう。

だが、それは同時にラエスリールにとっては絶望的に不利な立場を思い知らされるだけの真実だ。

それが事実なら、ラエスリールに勝機はない。

せっかく闇主がくれたこの機会も、何の意味もないものとして終わってしまう。

違う、違う、違う、違う！

そんなはずがない。

ここで終わりのはずがない。

考えろ、思い出せ。

あらゆる事象の記憶を取り出して、絶望ではない可能性を見つけ出せ！

刃を交わす度に敗色濃厚となる状況で、ラエスリールは必死に勝機を求めた。

そして、ようやく思い出した。

自分はずっと紅蓮姫とともに戦ってきたけれど、紅蓮姫の力に頼ってばかりいたわけではなかったことを。

あまりにも、戦いの記憶と紅蓮姫の存在が近くに在りすぎたから、同じモノだと錯覚してしまっていたけれど……それは違う。違ったのだ。

とても近しい位置にあったのは確かだけれど、紅蓮姫の在り方と自分のそれは違うのだ。

それは、もうわかっていたはずのことだったのに……どうして忘れていたのだろう。

「紅蓮姫」

短く告げて、対処を変える指示を下した。

女皇が勝利を確信した一撃を加えてくるのが見えた。

余りある力の全部をかけるような愚かな真似は女皇はしない——今この時の自分の命を完全に絶つだけの力を以て振り下ろされる刃を前に、ラエスリールは冷静に言い放った。

「紅蓮姫、解け」

と。

刹那、確かに女皇の放った力は、紅蓮姫から放たれた紅蓮の輝きによって打ち消されたのである――！

3

「面白いわね」

自分の攻撃を受けるのでなく解くことで受け流したラエスリールに、女皇は楽しそうに笑った。

「一の君の魅了眼とは、違う使い方ができるのね……それは、魅縛師だったというあの女性のせいかしら？」

ならば、これはどうかしら――？

笑いながら、漆黒の刃を揮う――刃から溢れた闇が、彼女の右目に襲いかかる！

なぜ、その時そう叫んだのか、ラエスリールにはわからない。

わからないまま、彼女は飛び退きながら「来るな！」と闇に命じた。

得体の知れない何かが、その闇に潜んでいるような気がしたのだ。

命じられた部分の闇だけが、言葉に従うように宙にかき消えた。だが、新たな闇が今度は彼女の足に向かって伸びてきた。

「紅蓮姫、解け！」

叫びながら、真紅の刀身を揮う。

女皇の命を糧とすることを拒む破妖刀は、いつもの勢いに欠けている――食欲のままに暴走する心配がないのはありがたいが、食欲魔神でない紅蓮姫は紅蓮姫ではないような気がして落ち着かない。

そもそも、なぜ、紅蓮姫は女皇の命を拒むのか。侍黄の時は、彼に宿る命が一度冥の海に落ちたものだからだと思った。

死の向こう側から引き戻された彼の命は、闇ならぬ闇に侵されており、それゆえに紅蓮姫が受けつけないのだと――そう理解したのだが、女皇の場合それはないはずだ。

何が原因か――だが、ゆっくり考え込む暇など、相手が与えてくれるはずもない。

新たに揮われた黒剣から溢れた闇が、またしても右目を狙う。

ぞっとした——理由はわからないが、ラエスリールはそれに触れることを本能的に恐れた。これまで一度としてなかった感覚ゆえに、彼女の動きが一瞬遅れる。

そして——。

ざしゅり。

女皇の放った闇が、ラエスリールの頬を掠めた瞬間、彼女は反射的に叫んでいた。

「白闇……いや、白焔っっ！」

原初の海辺から連れ出した四闇のひとつに命じる。

「この傷を灼け！」

告げると同時に、目映いばかりの白焔が目の前に出現し、女皇の闇が掠めた傷を舐める。

想像を絶する熱に傷口が灼かれるが、ラエスリールは構わなかった——そうしなければならないのだと、理由もわからず確信していた。

「まあ、なんて無茶な真似をするのかしら。よく、そんな戦い方でこれまで生き延びて来られたわね」

呆れたような感心したような女王の声に、しかしラエスリールは答える余裕はない。
恐ろしい予感に、心臓が凍りつきそうだった。
自分は、恐れているのか――目の前の少女を。
戦う覚悟は決めた。未来を勝ち取るためになら、どれほど傷ついても戦うと、心に決めたはずだというのに……なのに、心の奥底では、自分は女皇を恐れているのだろうか。
いや、恐怖を否定するつもりはない。
これまでだって、恐怖なしに戦ってきたわけではない。
恐怖もまた生きるために必要な感情だ。恐れる心を持たぬ者は、危険を顧みずに死の淵へと飛び込むものだ。危険を避けるため、あるいは切り抜けるために考えることを放棄した者が、容易く生き延びられるほどこの世界は甘くない。
だが、今ラエスリールの心を占めているのは、これまでに味わったことのない、絶対的な拒絶感だった。
あの闇に触れてはならない、絶対に！

触れれば、何か取り返しのつかないことが起きる。
本能が告げる警鐘に、肉体が逆らえない——女皇を相手に無傷で勝利を勝ち取るなど、到底できるはずがないというのに！
「どうしたのかしら、先ほどから逃げてばかりね。あなたの得物に合わせてあげたのに、これではちっとも楽しくないわ」
女皇はそう告げると、軽やかに床を蹴った。
飛び込んでくる！
漆黒の双眸をきらきらと輝かせながら、黒剣を振りかざす！
足が逃げそうになるのを必死に堪え、ラエスリールは唇を噛んだ。
漆黒の刃に怯みそうになる自身を叱咤し、右目に集中する。紅蓮姫をかざし、黒剣の一撃を受け止めながら、女皇が放つ闇を凝視する。
何だ。
何が原因だ。
自分を怯ませるものとは、何なのか。

思い出せ、と自分に言い聞かせる。
恐怖と向き合うことを、自分は知っているはずだ。忘れたというなら、今一度思い出せ。
得体が知れぬという理由が、恐怖を増幅させるのなら、知ればいい。そのための力はこの身に宿っている！
金色の瞳をらんらんと燃やしながら、彼女は女皇の闇と向き合った――。

※

両者の戦いを見守りながら、白焔の妖主白煉は苛立ちを隠せずにいた。
ラエスリールの戦いぶりが気に障って仕方ないのだ。
無様だ、と思う。
女皇の攻撃から逃げ回っているようにしか見えない。あんな戦い方しかできない娘だったろうか。

いや、違う。

少なくとも、自分と戦った時のあの娘は——当時少女だった彼女は、もっと違っていた。

焔に灼かれ、血を沸騰させられながら、それでも愚直なまでに突き進んできた。柘榴の妖主の言葉に頷くことはできないが、あの少女だったからこそ、自分は命を奪われたのだ。

今の、目の前の娘とは違う。

これでは到底、漆黒の少女に勝つことなどできぬだろう。勝敗は火を見るよりも明らかだ——柘榴の妖主が何を考えてあの娘をこの場に引きずり出したのかは知らないが、無駄骨だったとしか言いようがない。

娘の情けない姿には、さすがの男も平気ではいられまい——そう思いながら目をやるが、相手は涼しい顔を崩していない。

いや、それどころか楽しげにすら見える顔で、両者の戦いに目を向けている。

どういうつもりだ？

男の意識の天秤が、逆の方向に傾いたのだろうか、とも思ったが、どうやらそうではなさそうだ。非常に珍しいことに、ラエスリールに向ける眼差しには、はっきりとした熱が宿っているのだから。

――どうして、おれが嬉しそうなのか、不思議か？

声ならぬ声が直接脳裏に飛び込んできたのはその時だった。

相手を特定した心話の回路を繋げられたのだ。女皇の妖気が支配するこの城で、本来それは不可能なはずだったが、いかなる手を使ったのか、男はそれを可能としたらしい。

妙なところで器用な男だ。

白煉はせっかくの機会だと、相手との会話に応じることにした――一対一の戦いを女皇が望んでいる以上、手出しはできない。

だが、黙って見ているだけというのも腹立たしい。ことに戦い手の片方の不甲斐なさといえば苛立ちを通り越して怒りを覚えるほどだ。

それぐらいなら、まだしも男との会話で気を紛らわしたほうがましだ。

——お前の意識の天秤が、あの娘の破滅に傾いたのでもなければ、不思議に思わぬほうがおかしいだろう……こんな見苦しいものを楽しそうに見ているお前の気が知れん。

苦々しい想いのままを伝えた白煉に、男が笑う。

——見苦しい、か。白煉、お前の目にはラスはどう映っている？

どうもこうもない。

——見苦しい、不甲斐ない、情けない、醜悪だ。こんな小娘に、一度は不覚を取ったのかと思えば、我が身が嘆かわしくなるわ。

逃げるばかりで、飛び込む姿勢がかけらも見て取れない。

こんなものは戦いとは呼べない。相手である女皇を愚弄しているとさえ言ってもいい。

男はこれに否やは唱えなかった。

——そうだ、実に情けないありさまだ。ラスとも思えん醜態だ。あいつがこんな風に怯んだところなど、誓って一度だっておれは見たことがない。

唯一の『女皇』などと呼んだ相手に対するものとは思えない酷い言葉だが、今の姿を目にすればそれも無理からぬことだと思える。

奇妙なのは、それでいながら、男の声音が上機嫌であることだ。

この戦いとも呼べぬ戦いに、男は何を見ているのだろう――何を見出せば、こうも上機嫌でいられるというのか。

白煉は不思議でならなかった。

――……お前、何を知っている？

ずばりと切り込んだ彼女に、男はすぐには答えなかった。

――柘榴の！

焦れて怒りをむき出しにした彼女に、男は答えにならぬ言葉を返してきた。

――おれは知らない。もしかしたら、金の野郎は知ってるかもしれないが、口を割る気は皆無だろうな。現に、回路はあいつにも繋げてるが、だんまりを通してやがる。

白煉は驚いた。

てっきり自分と柘榴の妖主の間にのみ構築された回路だと思っていたのだ。

それだけでも、この空間で築き上げるのは至難の業だと理解するからこそ、それ以上の大がかりな回路が仕掛けられているとは思わなかったのだ。

驚愕に軽く目を瞠り、王蛮の妖主に目を向ける。

柘榴の妖主の言葉が真実であれば、この会話は彼にも聞こえているはずだというのに、金の闇の化身の様子からは、そんな気配は読み取れない。

完全なる無視――いや、黙認か。

彼は会話に参加しようとしない代わりに、女皇に内密で築かれた通話回路を断絶しようともしなかったのだから。

その真意はどこにあるのか、気にはなったが、白煉にはそれ以上に気になることがあった。

疑問の答えを得るために、好感度においては大きく劣る男との会話を選ぶしかなかった。

――お前が知らず、妾が知らず、王蛮の方だけが知っているかもしれぬ何かと、今のあの娘の無様な姿に関連があると思っているのか？

答えは即座に返って来た。

――思ってるんじゃない、何かがあるには違いないとおれは確信してるんだ。あいつがあんなに怯むほど、大きな爆弾を巨鳥は抱え込んでいるんだよ。恐らく、本人も知らないうちに仕掛けられてる……おれたちにこの世界を投げ与えながら、根本的な部分ではがんじがらめに縛り上げやがった『創造主』のやつらにな。

創造主――それは、この世界と自分たちを生み出した存在のことだ。

人間はそれを神と見立てて仰いでいるが、白煉を含む五要たちにとって、それはもう少し身近で、生々しい存在だ。

人間が多大なる期待をこめて創り出した『神』などとは違う。

どんな姿をしているかなど知らないし、直接声など聞いた覚えもない。それでも人間たちがいつしか持ち出した『神』という概念が、自分たちを生み出した『創造主』とかなりの部分で重なるのは奇妙なことだった。

ただし、人間が呼ぶ『神』と、自分たちが魂に刻まれた情報から知る創造主との間には決定的な違いがある。

人間は『神』が自分たちのためにこの世界を創世したと信じているが、創造主が作ったのは人間のためではない、魔性のための世界であるということだ。

それは、五要である妖主の意識の奥深くにのみ刻まれた真実であり、それ以外の魔性たちは知らぬことだ。

この世界は、純粋に魔性のためだけに生み出された。

人間という種族が生まれたのは、創造主たちの意図したことではない。

予定外に生まれた新種を、五要である妖主たちはもしかしたら最初の時点で滅ぼすべきだったのかもしれない。

取るに足らぬ存在であるうちに、滅ぼしてしまえば、世界は創造主の意図した通りの、魔性のためのもので在り続けたのかもしれない。

そうすれば、創造主たちの間で諍いが起こることもなく、五要に相反する創造主の命が下されることもなく、魔性は彼らの期待するままの純粋な存在であり続けることができたのかもしれない。

なぜ、人間という種族が生まれ落ちた時、その存在を看過したのか。

当時の記憶が突如として蘇ってきたことに、白煉は違和感を覚えた。
覚えている。
短命で脆弱ながら、生きるという目的以外を持ちうる知的生命の誕生に、確かに自分は興味を抱いたのだ。
どんな生き物に育つのか、見てみたいという興味が勝り、その種族の存続を認めた。
他の妖主たちの意識がどうであったのかは知らないが、結果的に自分たちは人間という種族の誕生と存続を是としたのだ。
脆弱なる肉体と短命な命しか持たぬ代わりに爆発的に増える新種の命。
さらには知能を得たことにより、人間は瞬く間に世界中に散らばった。
そうして……そうして、魔性にとって致命的な毒をまき散らすようになったのだ。
強い憎悪、強い殺意、強い妬み、強い愛情。
それまで世界に存在しなかった強すぎるほどの感情を抱き、放つことで人間は絶対的弱者でありながら魔性の意識を浸食した。
他者を踏みつけることにより、自らの優位を確信する喜びも、他者を操り弄ぶ楽し

みも、それまでの魔性は知らなかった。

人間が、教えたのだ。

だが、それは人間の世界においては食うか食われるかの究極の選択の果てに存在した歪(ゆが)みである。

白煉はそれを知っている。

その甘美(かんび)な喜びに長らく身を浸(ひた)してきた身ではあるが、そのことはよく知っている。

いや――。

そうではない。

今この時になって、そうであることを「思い出した」のだ！

そう……ずっと、そんなことは忘れ去っていた。否、忘れさせられていたのだ。

愕然(がくぜん)とした。

――柘榴の！

驚愕(きょうがく)に目を瞠り、まさかという思いのままに白煉は柘榴の妖主に目を向けた。

そんなことがあるのか。あり得るのか。

認めたくない。

断じて認めたくない。否、認められるものではない。

だが、それなら、この記憶の喪失は？　今の今まで魔性の王たる自分に存在するこの記憶の欠落は――。

何者になら可能なのか。

答えは、ひとつしかない――。

――この世界は、我らのもののはずだ。女皇が出現するまでは、その約束だった！

その通りだ、と深紅の男が頷く。

――だが、あいつらは、そんな約束を守るつもりなんかなかったってことだろう。あいつらにとっちゃ、おれたちは自分で生み出した手駒に過ぎない。自分に都合悪くなったら、いくらでも条件を変えてやり直せる程度のモンでしかない。実際、やつらはそうしただろう？　そんなことにすら、おれたちは今の今まで気づくことさえできなかった……ラスが、原初のおれたちに繋がる闇を持ち帰って来てくれなければ、意識もせずに勝手に奴らにおれたち自身が書き換えられていたことにだって気づくこと

はできなかった。

恐ろしい——恐ろしすぎる指摘だった。

お前たちは世界の主、要石なのだと誇りと矜持を与えた上で、気づかせぬように支配する——不要な記憶は消去して、都合の良い情報だけを与えられ……正しく、掌で踊らされていた道化こそが自分たちの正体なのか。

それこそ、無様で不甲斐なく醜悪な……。

ぎり、と白煉は唇を噛みしめた。

許し難い侮辱、認めがたい屈辱だ。

——柘榴の。

告げる声は冷ややかだった。

氷結など生ぬるい、まさに世界を構成する粒子の一粒にすら、自由に身動きすることを禁じるほどの絶対の怒りと決意を以て、彼女は同輩に問いかけた。

——醜悪に逃げ回るばかりと見えるあの娘のその果てに、何かがあるとお前は言うのだな？

自分たちの誰ひとりとして知らぬ、価値ある何かが……その真実が。
応じる答えもまた簡潔――。
――あいつは、これまで真っ直ぐに進むことしか知らなかったやつだ。そいつが真っ直ぐに進めない。いや、直進したら未来はないと本能的に悟ってる。だとしたら、何かがあるに決まってる……これまで同様、都合の悪いことはおれたちに隠した創造主どものろくでもない企みがな。
その心の声音に悔しげな意味合いが含まれていると感じたのは、果たして白煉の気のせいなのか。
――よかろう。
悔しさにはらわたが煮えくり返そうな思いを噛みしめながら、白煉は告げた。
――ならば、もう少しだけ妾はこの苛立ちを堪えて事の次第を見極めてやろう。
そうして彼女は心話を打ち切り、目の前の現実に意識を戻した。
隠された真実が露となるその瞬間を見据えるために……それがどれほど残酷なものであろうとも、目を背けることを彼女は自身に許さなかったのである。

そして、まさにその刹那を狙ったかのように、固く閉ざされていたはずの広間の扉が何者かによって開かれた！

「ラス！」

響き渡った青年の声は、しかし白煉には意外なものではなかった――。

※

失望が、女皇の心に小さくはない翳りを落としていた。

始める前は、あれほどに期待に胸を躍らせたというのに、始まってしまった戦いは、彼女の想像を裏切るものでしかなかった。

初めて得た対等な敵――唯一自分と対峙できる相手であるはずのラエスリールは、まともに戦おうとしていないとしか思えない。

斬撃こそ受け止めるが、それ以上の意志が感じられない。のらりくらりと逃げ回っているとしか思えない。敵としての礼儀すらうち捨てた恥知らずの所行を繰り返す相

手に、女皇は激しい怒りを覚えた。
何なのだ、この女は。
自分を止めると言い切ったのではなかったか。自分と戦うことによって、人間の未来を勝ち取ると、確かに口にしたくせに、逃げ回るばかりではないか。
こんなものは戦いとは呼べない。
こんな茶番につきあうために、緋陵姫（ひりょうき）に嫌われる覚悟をつけたわけではない。
もう、いい。
女皇はこの茶番に見切りをつける。こんなものにつきあってやる義理はない。
もう、さっさと終わらせてしまおう――。
そう思い、ラエスリールへの最後の攻撃を加えようとしたその時、耳に飛び込んで来た声に、彼女の苛立ちはさらに大きくなった。
閉ざしたはずの扉を開いたのが誰であるのか、見るまでもなくわかっていた。
「ラス！　いったい何をやってるんです！　逃げ回るだけとは、あなたとも思えない！」

叱責の内容には大いに賛同するが、発した相手が相手であるだけに、女皇は少しも楽しくなかった。

そもそも最初から気にくわなかったのだ。

乱華。

一の君たる王蜜の妖主のもうひとりの子供――大した力もないくせに、威勢だけは良く、こざかしくあれこれ企むタチの悪い存在。

路傍の石たる自覚も持たず、女皇が大切に思う相手から無条件の愛情を注がれることすら当然だと思い込んでいる、許し難いまでに傲慢な青年。

無様な内容とはいえ、五要すら立ち入ることの許されぬ戦いの場にしゃしゃり出て来るとは、いったい何様のつもりなのか。

戦いへの失望だけが占めていた胸に、無礼極まりない青年への怒りが生まれる。

ああ、本当にこの姉弟にはがっかりさせられるばかりだわ。

だから、決めた――要らない、と。

緋陵姫は嘆くだろう。ふたりが世界から消えれば、あの綺麗な女性は自分を恨み、

憎むかもしれない。

だが、もう、それでもいい。

どうせ、彼女の大切な存在のひとりは消し去らなければならないのだ。恨まれるのなら、消す相手がひとりでもふたりでも同じことだ。

そうしてかけがえなく思うふたつの存在を奪った自分を緋陵姫が憎むのなら――全身全霊の憎悪を自分ひとりに向けてくれるのであれば、それはそれでいいではないか。

少なくとも、彼女の瞳が向けられるのは自分だけになる。

優しい彼女を悲しませるのは残念だが、それで彼女を独占できるのなら、やる価値はある。

こんな茶番につきあうより、余程意味がある。

心を決めた女皇は明確な殺意を込めたふたつの闇を生み出し、放った。

ひとつはラエスリールに、もうひとつは乱華へと。

それで終わりだと信じて疑わなかった少女は、しかし次の刹那、そうはならなかった現実に目を瞠った。

乱華の命を摘み取るために放った力は――その闇は。

彼ではなく、庇うようにその前に立ちふさがった王蜜の妖主の体を貫いたのである

――！

天を支える者 外伝

憧れは遠くに置きて抱くもの

プロローグ

新たな年を迎えたものの、いまだ冬の息吹の色濃い大陸最大版図を誇るディエーンが王都ロスタロイド――。

その街の中、いち早く春の気配に包まれた屋敷があった。

そこはロスタロイド中の人間が認める「魔法屋敷」――都の誰もが尊敬をこめて「ファティ・リンシャ」と呼ぶ初老の貴婦人が住まう場所だった。

その屋敷は常に精霊たちに守られ、害意や悪意を持つ者の侵入を許さぬ場所であり、篤き精霊の加護により、常世のごとき穏やかさを保つ空間である。

北風も風雪もこの屋敷には届かない――魔法屋敷の女主であるファティ・リンシャそのひとが望まぬかぎり。

そして本日、上品な初老の貴婦人は、それを望んではいないらしい。
初春と呼ぶには早すぎる時季にもかかわらず、屋敷には春としかいえぬ陽光が届き、木々や草花の芽吹きを促すような温暖な空気が満ちていた。
年が明けてまもなくの頃のこと――この屋敷の外では考えられない奇跡である。
が――。
その庭先で開かれた茶会に招かれた少女――ナルレイシアは、そんな奇跡にも気づかぬ様子で熱く熱く拳を握っていた。
「ああっ！　いよいよ明日っ！　明日なんですねっ！」
庭先に出されたテーブルにつくのは四人――屋敷の女主人を含め、皆特徴的な人物ばかりなのだが、この話題に限っては凄まじいテンションを見せたのはそのうちの半分……ふたりだけだった。
「そうです、ヴィル・ダカール！　いよいよ明日なんです！」
応じたのは、緑がかった金髪に灰緑色の双眸を持つ、言っては何だが人外としか表現しようのない美貌の青年である。

彼の名はスカルトード・ナネリーアン・フォスカリク――ガライラ大公国の出身だが、このディエーンでは神殿の要職にある青年だ。

ちなみに、熱に浮かされたように最初に発言したナルレイシアも、見事な金髪に目映い琥珀の双眸を持つ、見た目だけなら文句なしの美少女だったりする。

そんなふたりが、目をきらきらを輝かせながら「そうですよね！」「ええ、そうです！」と手に手を取り合う姿は、まさに眼福の結晶としか言いようがない。

そんなきらきらしいふたりが、なにを熱く語っているのかといえば――。

「明日っっ！　ついに明日っ！　長らく秘密のヴェールに包まれてきたマギル・レヴィインが、ついにっ！」

「そうです、ヴィル・ダカール！　長年正体不明だったマギル・レヴィインがついにっ！　その正体を明らかにするんですっ！」

重度の活字中毒者ふたりの異様な盛り上がりぶりに、しかし同席していた全員が同意の念を抱いているわけではなかった。

「馬鹿か」

本当に、心底馬鹿にしたような声音で、冷ややかに言い切ったのは、黒髪紫瞳の青年――エルスカーネ公爵ガスカールだった。

「どれほど名が売れていようが、そいつは文筆家だろうが。顔じゃなく、書いた内容で勝負するのが本筋のはずなのに、今更顔を出すというだけのことで、どうしてお前らはそこまで浮かれるんだ？」

実際、浮かれすぎている自覚はあった二人は、その言葉に少しだけ反論するのに時間を要した。

もっとも、それはすぐに叶ったのだが。

「だって、だって、だってっ！　マギル・レヴィンなのよっっ!?　数々の名著を書き続けてきた大作家なのよ!?　代々その名を受け継ぐ上で、先代以上の作品を書き上げない限り決して名乗りを上げないと誓った作家集団が、今回初めて「当代」を名乗ったのよ!?　これがとんでもない大事件じゃないなんて、きっと誰も思いやしないわ！　ねえ、そうですよね、スカーさん!?」

熱い思いを分かち合う同志に話を振ると、神々しい美貌も目映い青年も大まじめに

頷いた。

「ヴィル・ダカールのおっしゃる通りです。カール、君は興味ないことにはとことん無関心だが、マギル・レヴィンのことぐらいは把握しておくべきだよ。彼はこのディエーンばかりでなく、大陸を代表する大作家だ。小説ばかりでなく歴史書や評論でも彼以上に高く評価されている作家はいないと言っても過言ではないんだ。彼が最初に出版した本が今から二世紀以上前のものであることと、彼が決して表舞台に出ようとしなかったことから、その正体は代々その名を受け継ぐ知識人集団ではないかと囁かれていたんだが、今回当代を名乗る人物が初めて顔を出すというんだ。これは、今回出版される本がマギル・レヴィン最高傑作であるからに違いないと評判なんだよ。これに興奮しなければ、知識を愛する人間として間違っている！」

最初のほうこそ淡々と説明していたスカルトードだが、話している内に声には段々力がこもり、最後は高らかな叫びとなった。

そして、思いはぴったり重なるナルレイシアがうんうんと頷いて「その通りです、スカーさん！」と叫んだものだから、黒髪の青年公爵は諦めたように——それでいて、

これ見よがしに――ため息をひとつ漏らした。
処置なし――もしくは、匙を投げたというところだろうか。
「……まあ、マギル・レヴィンの著書はわたくしも全部持ってますけどね……」
そこにおっとりと声をかけてきたのは、この屋敷の女主人にして、長年隣国イアンダールを支え続けてきた女性――ファティ・リンシャだった。
銀髪に淡い藤色の瞳を持つ初老――にしか見えない――女性は、穏やかな眼差しをナルレイシアとスカルトードに向けて告げた。
「あまり夢は持たないほうがいいかもしれないわよ」
と言うなり、意味ありげに「ふふ、ふ」と笑った。
外見年齢五十路初め――しかしながら、その実年齢はといえば数百歳という、神の一員である女性のその言葉に、ナルレイシアとスカルトードがぎょっとしたように息を呑んだのは無理からぬことであった。
この世界の天と地――その間である『空』を支えるべく選ばれた存在……柱神。
長らくその務めを負っていた老婦人の言葉は重い。

「え、え？　なんですか、ファティ・リンシャ？　その意味ありげな発言の意図は⁉」

「お願いですから、そんな気になるところで切らないでいただけませんか⁉　もしかしてファティ・リンシャは当代のマギル・レヴィンをご存じなのですか……っ⁉」

慌てて問いかける少女と青年に対し、数世紀を生きてきた女性はつかみどころのない笑顔で応じた。

「ふふふ。内緒」

……身も蓋もない。

「ファティ・リンシャ？」

「ファティ・リンシャ⁉」

喜びに全身を浸していたふたりの活字中毒者が、不吉な予感を覚えて必死に呼びかけるのに対して、数世紀を生きる現人神はにこやかな笑顔を絶やさぬまま——無言の拒絶を貫き通した。

そのときのふたりの心境を一言で表現するなら——。

……厄介ごとが、来る……？

これに尽きた。

1

たとえ嵐が来ようとも、それでも行かねばならない時はある。

前日のファティ・リンシャの不穏な言葉が気にならないわけがない――それでも、その日……当代マギル・レヴィンが初顔見せを兼ねた新刊発売日、ナルレイシアはファティ・リンシャの屋敷の外に広がる銀世界に踏み出すべく、滑り止め完備の長靴の紐をしっかりと結んでいた。

彼女には、自分が不運どころか凶運に好かれる特異体質である自覚がある。

万全の備えをしても、思いがけない――どころか、誰も想像できない最悪の事態に巻き込まれる可能性は大。

それを見越して行動しなければ痛い目を見るというのは、たった十数年の人生経験

で痛いほどに刻み込まれた経験則だ。

「靴紐の緩みなし。靴底の釘に不具合なし。念のための杖も折れる心配なし。購入予定の新刊が雪塗れになって台無しにならないよう、リュックにした防水処理も完璧！」

マギル・レヴィンのサインをもらうための整理券も防水加工したリュックのポケットに収納済みだ。

これなら、何があろうと整理券は死守できる。

何しろ伝という伝を総動員して、ようやく手に入れた整理券なのだ。当代マギル・レヴィンが今回に限りこれまでの流通路を通さずに出版したおかげで、ナルレイシアとスカルトードは整理券入手に本当っに苦労させられたのだ！

それというのも、整理券配布の場所が、彼らが日常通い慣れた書籍工房通りのある一角ではなかったからだ。

新刊の予約を入れると同時に前金を払うことで、ようやく整理券をもらえるという仕組みは別段おかしなことではない。ふたりとも、嬉々として指定された店を訪れ、

整理券をもらおうとしたのだ――熱烈な活字の信奉者であるふたりは、自らの特権を笠に着ることなど最初から思いもしなかったのだ。

だが、そこで問題となったのが、スカルトードとナルレイシアの目立ちすぎる容姿だった。

絶世の美貌を誇るスカルトードと、陽光の恵みがそのまま姿を取ったかのごときナルレイシアの二人連れがその店を訪れた途端、奥から飛び出してきた店長がしつこくしつこく――辟易を通り越し、こちらが警戒感を抱かずにおれぬほどの執拗さで二人を質問攻めにしてきたのだ。

マギル・レヴィンの新刊予約とサイン会の整理券がかかっていなければ、即座にふたりとも踵を返していたに違いない。

だが、我慢にも限界というものがある。

他の予約者は名前を書くだけの紙が配られていたというのに、二人に渡された分には、名前に住所、緊急連絡先まで記入するよう印刷されていた。

いくらなんでも、サイン会の整理券配布だけで、ここまで求められるのはおかしい。

その思いはスカルトードも同じだったらしく、ふと目が合った瞬間、ナルレイシアは最早特技となった早業「わたしは女優」で、かよわい美少女らしくふらりと彼に向かって倒れかけたのだ。

ナルレイシア以上に演技が上手なスカルトードが、ナルレイシアの不調を理由にその場は退散した――ふたりとも、あからさまに注目されては困る事情を抱えているだけに、詮索されまくるのは有り難くない事態だったのだ。

それでもマギル・レヴィンの新刊とサイン会への未練は断ち切りがたく、ふたりは後日知り合いに頼んで整理券を取って来てもらった。

ふたりが使った伝とは、自分たちの代わりに整理券を取って来てもらうためのものだったのだ。

雪道仕様の靴を履き、ナルレイシアは「いざ決戦！」とばかりに、サイン会会場である店へと歩き出した。

黒髪の青年公爵が、この件を聞いていたなら「あからさまに怪しいだろうがっ！少しは頭を使え！」と怒鳴りつけていたかもしれない。

だが、この時のナルレイシア――スカルトードもだが――は、「それはそれ、これはこれ」という心理状態にあったのだ。

憧れのマギル・レヴィンに会えるということで、通常時でも充分とは言い難い警戒心が枠外に吹っ飛んでいたのである。

『大好きです！　尊敬してますっ！』

この一言だけを伝えたいと思う少女は――神がかった美貌の青年もだが――浮かれきっていた。

大きすぎる情熱は、時にその持ち主を落とし穴に突き落とすこともあるということを、彼らふたりが痛感するのはもう少し先のことである。

※

雪を理由に目深にフードを被ったおかげで、ナルレイシアとスカルトードは無事にサイン会の行列に並ぶことができた。

ほっと安堵の息をつき、行列の最後尾に並んだふたりは、顔を合わせるなり笑みを交わした。

両者ともに声には出さなかったけれど「ああ、騒ぎにならなくてよかった！」「本当にそうですね！」という思いは目と目で通じ合えたのだ。

あとは、整理番号の進むまま、憧れのマギル・レヴィンとの対峙の瞬間を待つばかり――わくわく、どきどき、ナルレイシアの胸は弾みっぱなしだった。

恋愛小説から社会派作品、歴史物に史実を克明に解説する評論書に至るまで、マギル・レヴィンという作家はある意味節操なく書き綴っている。

それでも彼の著作が多くの読者に支持されるのは、その内容の濃さと説得力ゆえだ。

一見浮いた恋愛話と見える作品であっても、端々に見える世情の正確な描写と、わざとらしくない程度に抑えられた克明な登場人物たちの心理描写に、読者は「やられた！」と思うしかない。

どうしたら、こんな作品を描き続けることができるのか――憧れて憧れて憧れつづけたひと――たちの、新たな後継者――に、ついに対面が叶うのだ！

興奮するなというほうが無理だ。

「ああ、もうすぐ……」

憧れのマギル・レヴィンの名を継いだひとに会える！

抑えようにも抑えきれない興奮に声が震えるナルレイシアの呟きに、応じる青年の声も熱く震えていた。

「ええ、もう、すぐです……！」

人目がなければ、その場でふたり、手に手を取り合い神に感謝の言葉を捧げる場面であったのだが、頭巾を被ったふたりがそんな行動に出ようものなら、何かおかしな宗教かと思われる可能性が高く、ではだからといって頭巾を払って素顔でやった場合、異様なまでに周囲の視線を集めまくるに違いないことはわかっている上に、先日の執拗な勧誘を繰り返してきた関係者がまたぞろ出て来かねないという思いがあったため、控えたのだ。

ナルレイシアとスカルトード――素顔を晒せば目立ちすぎるふたりが、ここまで配慮したというのに、この日のイベントは無事には済まなかった。

何となれば、彼らふたり以上の爆弾が、この日降臨したからである。
ただし、その爆弾の存在は当事者を除けばささやかな騒ぎとしか報じられなかった。
ナルレイシアたちだとて、時間さえずれていれば、後になって「そういうことがあったのか」と思っただけだっただろう。
だが、並んだふたりが無事に『当代』マギル・レヴィンのサイン入り新刊を手に――勿論頭巾は深く被ったままだ――書店を出て来た時のことだ。
狭い店の裏口あたりで言い争う声が聞こえてきた。
「言いがかりもいい加減にしてくださいよ！」
辟易した思いを隠そうともしないその声に、ナルレイシアとスカルトードは思わず顔を見合わせた。
それは先日、こちらこそが辟易しそうになるほど、しつこくしつこくしつこくしつこく、自分たちの連絡先を聞き出そうとしたあの店員のものだったのだ。
サインをもらった他の客たちは、そんな小さな騒ぎには気づかぬ様子で帰っていく――気づいたとしても、せっかくの良い気分を台無しにされるのは御免とばかりに足

早に店を離れようとする。

ナルレイシアたちも、気分は同じだった。

（ああ、せっかく憧れの当代マギル・レヴィンに会えて、サインと新刊を手に入れられて、こんなに嬉しいことはないという日にっ！　騒ぎになんてかかずらってられないわ！　一刻も早く帰って、この新刊を読まなくっちゃっっ！）

これで困った声を上げているのが子供であったり、年若い女性であったり、あるいはお年寄りであったなら、彼女もこんな判断は下さない。

だが、相手があのうんざりするほどしつこかった店員となれば、少しぐらい困ったところで「自業自得でしょ」というものだ。

ちらりと目線で同行者の反応を探ったところ、神々しい美貌の青年も同じ判断を下したのがわかった——こちらも、新刊を一刻も早く読みたいというのが第一原因であることに変わりはないのだが。

ふたりは、だからこの——恐らく書店にとって迷惑な存在のことは、敢えて見て見ぬふりをすることを選んだ。

「あら、さっきは陽が射していたのに、また曇ってきちゃったわ」
「風も冷たくなってきました。このままだと、溶けかけた雪が再び凍りついてしまうかもしれません。そうならないうちに帰りましょうか、ヴィル・ダカール」
「そうですね、スカーさん。凍った路面で滑って転んで怪我するだけならともかく、そのせいでやっと手に入れた新刊が台無しになるのは御免ですし」
普通、買ったばかりの本が台無しになるより、滑って転んで怪我するほうをこそ忌避すべきことなのだが、筋金入りの活字中毒者たちとなると基準が違う。
「全くです。どんな完全な防水処理を施しても、人間のやることです、完璧は望めません。不完全なる人間は、自身が可能な限りのことを努めるべきです」
要約すれば、「あんなはた迷惑な店員がいくら困ってようが知ったことか、それより、買ったばかりのマギル・レヴィンのサイン入り新刊のほうがよっぽど大事」ということである。
「ですよね」
「そうですとも！」

頭巾で顔を隠した美貌のふたりが意見の一致を見た瞬間、新たなる声がナルレイシアの耳に届かなければ、それは本当に小さな騒ぎとして処理されたかもしれない。

「これは偽書だぞっっ！」

聞いた覚えがあるようなないような、それでいて絶対に看過できない一言が耳に飛び込んで来た瞬間、ナルレイシアはこの声のするほうへと飛び出していた。

それはスカルトードにしても同じことだった。

どこまでも活字を愛するふたりにとって、作家を騙り読者を偽る最悪の結晶とも呼ぶべき『偽書』の一言に反応せずにおれなかったのだ。

2

もしかしたら転んで、買ったばかりの新刊を犠牲にしてしまうかもしれないという不安も危惧も放り出し、ナルレイシアは声のしたほうへと駆けだした。

問題とされているのがどんな書籍であれ、偽書はいけない。それだけは、いけない。筆者と読者の両方を裏切る行為だ。たとえそこにどれほど真摯な内容が記されていようとも、自らが選んだ名ではない、先んじて世に出ている他人の名を勝手に冠した時点で、内容も何もかもが意味を失う。

後世、その内容が再評価されることがあったとしても、それは余程特殊な事情でもない限り――たとえば発表時、名を明かすことがそのまま命に関わる状況にあったという場合を除き――決してプラスには働かない。

だから、そんな真似をする者は多くない。

自らが綴る言葉とその世界に責任を負う文筆家にとって、盗作や偽書の疑いを向けられることは致命的なのだ。勿論、それは筆者に限らずその出版元にも同じことが言える。

たとえ騙されてのことであっても、偽書や盗作作品を出版したとなれば、世間の信用はがた落ちし、どれほど権威ある出版元であろうと、信用回復にかかる期間は短くはなく、その間に生じる損失は少なくはない。

だからこそ、出版を専門にする機関や会社は、事前に執拗なまでに出版物の内容を吟味する——後に騒ぎとなる可能性のある……つまり疑惑の残る作品に関しては全面的に回避するか、際どいやり方としては「真筆か否か？」と一応の煽りを入れておく等の方策を採る。

まあ、大手版元が後者をやり方を採ることは稀ではあるが。

ナルレイシアとスカルトードは、ともにこの上ない活字中毒者であるがゆえに、こうした事情にも通じていた。

真摯な読者として、真摯な版元の対応を感じ取るようになっていたわけだが、だからこそ、先ほどの言葉は看過できなかったのだ。

（偽書ですって!?　とんでもないわ！）

到底聞き逃しにできるものではない――その思いは「本の虫同盟」の盟友である青年も同じらしかった。

目立たぬように、頭巾を被ったまま、それでもふたりは声が聞こえた店の裏口へと駆けつけたのだ。

そして――そこで、目にしたのは。

「ええいっ！　放せ！　放さんか！」

屈強な、体力自慢とおぼしき若い男の店員ふたりに、両脇をむんずと摑まれてほとんど身動きできない状況にある初老の男性の姿だった。

「放せといっておるだろうが！」

「言いがかりを大声で喚くのを止めてくださるなら、すぐにでも放しますとも」

そう言うのは、先日整理券入手のために来店したナルレイシアとスカルトードにし

つこく連絡先を尋ねてきた店員だ。

いや、屈強な男たちを従えているところを見ると、もしかしたら単なる店員ではないのかもしれない。

「言いがかりとはなんだ！　偽書は偽書じゃろうっ！　マギル・レヴィンの名を騙った若造の持ち込んだ原稿を、何の検証もせずに出版して販売するなぞ、まともな版元のやることではないぞ！」

この言葉がナルレイシアとスカルトードにもたらした衝撃は大きかった。

この初老の紳士の言葉が正しければ、自分たちが買ったばかりのマギル・レヴィンの新刊は真っ赤な偽物だということになるからだ。

（え、えええええぇぇっー！）

悲鳴を上げなかったのは、意志の力で抑えたから――ではない。

驚きが大きすぎて声を上げることもできなかったのだ。

（もしかして、この初老の紳士が偽書偽書って繰り返してるのって、今買ってきたばかりのマギル・レヴィンの新刊のこと!?）

そうだとしたら、衝撃的すぎる。

というか、多分出版元の存続にも関わる大事件だ。

「検証ならしましたとも！　持ち込まれた原稿の筆跡鑑定の結果、真筆だと認識したからこそ発売までこぎつけたんです！」

むきになって己が正当性を主張する店員――もしかしたら店長かもしれない――は、己が発言に潜む矛盾点に気づいていないようである。

初老の紳士が、哀れむような目をして彼の発言の矛盾点を指摘するまで――。

「当代の筆跡鑑定はどうやって行ったんじゃ？　過去のマギル・レヴィンの原稿をもとにしたのではかなわぬことのはずだが……？」

それはそうだ。

過去代々のマギル・レヴィンの筆跡と、当代を名乗る人物の筆跡が一致するはずがない――するとしたら、故意に筆跡を似せたという可能性が高くなり、それは紳士の指摘を否定する材料とはなり得ない。

だが、店員はその言葉に動揺することはなかった。

「完全新作というのなら、ご指摘通りなのでしょうが、今回の新作は先代の残した未完成原稿を当代マギル・レヴィンが完成させたものなんですよ！　未発表で未完成だった作品を、後を継いだばかりの当代が完成させたわけです。だからこそ出版に踏み切ったんです、おわかりですか？　あなたは大変な思い違いをした挙句、マギル・レヴィンを侮辱してらっしゃるわけです。これ以上、騒ぎ立てられるのなら、警邏隊を呼びますよ！　まったく、迷惑にもほどがある」

件の店員が自信満々にそう言い切るのを待っていたかのように、紳士の両脇を拘束していたふたりの男が乱暴に初老の男性を路上に突き飛ばした。

積もっているとは言っても、倒れる衝撃を受け止めるほどの積雪ではない。

しかも彼らがもみ合っていたせいで、路上の雪は半ば融け、泥まみれの悲惨な状態となっている。

そんな所に突き飛ばすなど、腹立ち紛れだとしても、やり過ぎとしか思えない。

（いっくら、せっかくの新刊発売にケチをつけられたからって、こんなのはやり過ぎじゃない！）

店側の男性の主張が完全に正しいのだとしても――初老の紳士の主張を悪質な営業妨害だと認識した上のことだとしても、だ。

これはあまりに乱暴に過ぎる。

ナルレイシアは思わず声を上げた。

「何やってるんですか！」

男たちの視線が突き刺すように向けられるのを感じたが――本人、忘れているが、この場面で頭巾を深く被ったままの登場では、怪しげにしか見えない――構わず突き飛ばされた紳士の側に駆け寄った。

「大丈夫ですか？」

気遣うように声をかけると、初老の紳士はなぜか一瞬大きく目を瞠り、彼女の視線を避けるように目を逸らした。

「……ああ、いや、大丈夫……心配なさらず……」

もごもごと、と歯切れの悪い言葉を漏らす紳士を、しかし放っておけるはずがない。

上等な外套は、泥水まみれになっているし、乱暴に突き飛ばされたせいで、どこか痛めていないか心配だ。

（事情がどうあれ、こんな対応を取るだなんて、こんな店に単独販売を許した当代マギル・レヴィンの判断を疑うわ！）

今回の新刊が非常に入手困難とされた理由はそこにあった。

マギル・レヴィンが今回に限り、弱小版元を選んだこと――は、過去にないことではない。だが、その販売を担当する書店をひとつに絞るということは、これまでなかったことなのだ。

まあ、先ほど漏れ聞こえた内容から察するに、先代と当代の合作とも呼べる作品を発表することは、これまで例のないことであり、それゆえに出版規模を限定することにした――という線は考えられるのだが。

（それにしたって、版元……は知らないけど、書店の選択は不味すぎるでしょうっ！）

憤然と飛び出したナルレイシアだが、彼女はこの時、自分のミスに未だ気づいてい

なかった。

せめて頭巾を払った素顔で飛び込んでいれば、この後の騒ぎは間違いなく回避できていたに違いないのだが――かっとなって夢中で飛び出した彼女に、そんな配慮は望むべくもない。

「なんだ、お前！　こいつの仲間かっ!?」

「つるんで何企んでやがるっ!?」

屈強な男ふたりと店員が、眦をつり上げて迫ってくる。

はっきり言って、柄が悪い。

ナルレイシアが心底本の虫でなければ、この時点で危機感を抱いたに違いない。

故郷のフィレアでは誰一人として知らない者はない有名人「不幸中の幸いの権化」、「九死に一生の達人」と呼ばれるナルレイシアだ。

危険に対する感覚はずば抜けている。

だが、しかし――どれほど通常の危険やその予兆に敏感にできていたとしても、感じ取れるということと、回避できる能力に恵まれているということは違う。

さらに言うなら、敬愛するマギル・レヴィンへのこだわりに意識が偏りまくってしまっていたこの時点の彼女の言動は、はっきり言ってひとつも現実的ではなかった。

酷い扱いを受ける紳士を黙って見ていられなくて思わず飛び込んだだけだというのに、いきなり敵意の嵐に晒されまくり、ナルレイシアはようやく自分が下手を打ったことを悟った。

彼らの目には、自分とこの紳士が組んで言いがかりをつけたと見なされたのだろうことを悟ったのだ。

そういえば、自分は頭巾を被ったままだし、怪しい風体といえば言える。

（じゃあ、改めて顔を見せる？）

だが、今更顔をさらしたところで「怪しくない」証明にはならないだろう。

なじみ深い工房街なら、きっと自分の顔を見知ったひともいるだろうが、ここはいつもの行動領域ではない。

（ああ、なんか、段々視線が冷たく凶暴になっていってる感じが……助けるつもりが逆にふたりとも半殺しだなんて、そんな申し訳ない結果になりそうな予感がひしひし

と……っっ！）

それだけは、結果的に自分の凶運に巻き込んでしまった初老の紳士のためにも回避しなければ、とは思うものの、だが実際にどうすればいいのか、咄嗟には思いつかない。

（え、っと……ええーっっとっ!?）

恐慌状態に陥りかけた瞬間、冷たく澄み切ったその場の空気以上に澄み渡った声が響き渡った。

「ヴィル・ダカール」

穏やかで、それでいて聞く者にひやりとさせる何かを秘めた、独特な声がその場を支配する。

呼ばれたナルレイシアは勿論、凶悪な気配を纏いつつあった男たちが揃ってそちらに顔を向けた。

そして――。

（うわあぁぁあっ！　スカーさん、さすがです！）

ナルレイシアはこの上なく感激した。

彼女が目にしたのは、頭巾を外し、人外の美貌を露にした上、表情まで神々しい笑顔をたたえたスカルトードだったのだ。

彼の特技は、自らの美貌度をコントロールすることだ。

あまりに度が過ぎた美貌は、彼の日常生活をも困難にする弊害を持っている。

それも無理からぬことだ。

彼は現在存在する柱神――世界の天と地の狭間……『空』を支える存在中、一、二を争う美貌を誇るガライラの御柱ネイスリーズを大伯父に持つ上、うり二つの容貌の主なのだから。

普通に素顔を晒すだけで、周囲の魂を抜き取りかねない威力を発揮する彼が、平穏な日常生活を送るために取得した技術が、その美貌のレベルを周囲にそうと悟らせない気配支配である。

超絶無比なレベルの美貌を目にした事実を本人にそうと悟らせない――とはいえ、もともとの水準が凄まじすぎるため、見とれる者続出程度に抑えるのがやっとという

話なのだが……今、スカルトードはその制御を全解除していた。

神々光線全開の彼の素顔は、俗世に生きる人間の目には眩しすぎる――少なくとも目にした時間の数倍から十数倍の時間、『魂を抜かれる』状態に陥らせるに充分な威力を発揮するのだ。

凶悪な気配を放っていた男たちが、揃って惚けたのを見計らったように、スカルトードがにこりと笑った。

「ヴィル・ダカール、無茶は困ります。ファティ・リンシャとカールに叱られるのはわたしなんですからね」

「……すみません、でも……」

と続けた彼女に、彼はわかっていると頷いた。

「聞き逃しにできない話であることは同感です。だからこそ、ここはさっさと退散しましょう。その方の着替えも必要でしょうし」

確かに初老の紳士の格好は悲惨なものだった。

見るからに上質な外套はもちろん、その下の上着やズボンまで冷たい泥水まみれに

なっているのは間違いない。

「そうですね！　さあ、この場は一旦退きましょう！　事情がおありなのは漏れ聞いた内容からも想像できますから、ご相談に乗れると思います！」

だから、さあ、ご一緒に――勢い込んでそう言ったナルレイシアに、しかしその紳士は頷かなかった。

「い、いや、ご厚意はありがたいが……」

ふるふるとかぶりを振るその姿に、ナルレイシアは安心させるように告げた。

「大丈夫です！　きっとご相談に乗れると思います！　マギル・レヴィンのこの新刊が偽書かもしれないだなんて、わたしたちふたりにとっても大問題なんですから！」

スカルトードも大きく頷いた――ただし、こちらはナルレイシアのそれよりは意味深長な笑みがついていたのだが。

「その通りです。わたしたちにとって、マギル・レヴィンは特別な存在です。そんな彼の著作に関わる疑惑を放っておけるわけがありません。どうか、ご一緒ください、必ずお役に立ちますから」

満面の笑顔による好意的な申し出はしかし――ナルレイシアは気づかなかったが――どこか圧力を感じさせるものだった。

初老の紳士がさらにたじろぐ。

「い、いや、わし……わたしは……」

この慌てように、さすがのナルレイシアも不審を抱いた。

（なんだろう？　まるでわたしたちと関わり合いたくないみたいな……）

先ほどの店員に対しての、どこまでも退かない態度をとっていた紳士の、この態度の急変は何を意味するのだろう？

（まさか、あの店員が言ってたように、この方が単なる言いがかりをつけてた、とか？）

だが、そうだとしたら、なぜあの男たちではなく自分たちに対してこんな風に慌てるのかがわからない。

（うーん？）

怪しいのは確かだが、ナルレイシアはどうしても目の前の紳士を疑う気になれない。

会ったことがないのは確かなのに、何だか知ってる人のような気がしてならないのだ。それも、何があっても疑うことなどあり得ないと思うほど信じている誰かのような……。

自分がそう思える人間は限られている。

家族の誰とも似ていないから、他にそう思える人といえば……。

（ネイスリーズさま……は全然違うし、アマンシールさまとも違う……あ、でも、先ほどの落ち着いた雰囲気や醸し出す空気はちょっと似てるような気がしないでもないけど、でもそこまで似てるわけじゃないわよねえ。あとはあとは……ファティ・リンシャとは性別からして違うわけだし……あら、でもよく見たら、髪の色といい瞳の色といい、ファティ・リンシャと似たような色をしてらっしゃる……？）

もしかして、既視感を覚えたのはそのせいだったのだろうか。

そんなことを思いながら、首を傾げていたナルレイシアに、呆れたような新たな声がかけられたのは次の瞬間のことだった。

「なんだ、お前たち、こんなところで何をしてるんだ？」

不機嫌もここに極まれりという声を耳にした途端、ナルレイシアは振り返らずともその声の主の正体を知った。

出会って以来、険悪な声と視線以外向けられた記憶がない、相性最悪の青年のものだったのだ。

「ガスカール！　どうしてあなたがここにいるのよ!?」

思いがけない青年の登場に目を丸くしたナルレイシアに、黒髪紫瞳の青年公爵は、不機嫌そうに眉宇を顰めた。

「ファティ・リンシャに客人を迎えに行ってほしいと頼まれたんだ。なかなか会えないのに遠慮深い御仁だから、この機会を逃したくないとおっしゃって、最初はご自分がいらっしゃるところだったのを、この天気だから必死に押しとどめて、代わりにおれが来たんだ……が」

ガスカールの紫瞳が初老の紳士に向けられた後、ナルレイシアに戻る。

その眼光に宿る険しさが増した理由を、彼女は即座に直感した。

（誤解してるっっ！　この方のこの惨状がわたしのせいだってっっ！　完っ全っに、

誤解してるっっ！）

「ち、ちが……っ！」

慌てて否定しようとしたナルレイシアだったが、その声が終わるより先に、スカルトードの穏やかな声が割って入った。

「そういうことなら、早急に場所を移動したほうがいいでしょう。ファティ・リンシャのお客人なら、わたしにとっても大切なお方ですから」

促す声に、ナルレイシアもこの場の状況を思い出し、こくこくと頷いた。

スカルトードの必殺技も永遠に効果が続くものではないのだ、面倒を避け、且つ詳しい事情を聞き出すためにもこの場を離れたほうが良い。

そんなふたりの態度にガスカールも何か感じるところがあったのだろう、彼は紳士に向かって問いかけた——ただし、それは問いの形をとっただけの確認に過ぎなかったが。

「そういうことでよろしいでしょうか、オウエル・ノヴィン殿？」

尻餅をついた格好の紳士が、諦めたように天を仰いだ——。

3

三時間後――。

ファティ・リンシャの魔法屋敷に舞台は戻る。

ナルレイシアとスカルトードのふたりは、深刻な顔で向き合っていた。

「どう思われました、ヴィル・ダカール？」

先に問われたナルレイシアは、ふう、と深いため息を漏らした。

「わたしは……これはやっぱりマギル・レヴィンの作品だと思いましたが、スカーさんはどうですか？」

先ほどの騒ぎのことを思うと――さらにその渦中にあった人物が、ふたりが尊敬するファティ・リンシャの知り合いである以上、かの紳士の言い分を無視するのは気が

引けるのだが……ナルレイシアがあれから大急ぎで――待望の新刊だから、じっくり味わって熟読したかったのだけれど――目を通したところ、文体にしろ内容にしろ、やはりマギル・レヴィンの真作にしか思えなかった。

スカルトードも同様の感想を抱いたのだろう、「そうなんですよね」と頷いた。

「マギル・レヴィンの作品は、出版禁止令が出たものを除けば、ほとんど網羅しているつもりなんですが……」

「わたしもそうです。故郷のお師匠さまの書棚には絶版本も揃ってましたし……」

ふたりとも、それだけマギル・レヴィンという作家の著作には詳しい。

純粋なファンである分、下手な評論家などより鋭く見分ける力を持っている。

そのふたりとも、今回の新刊はやはり偽書とは思えないのだ。

では、なぜあの紳士――オウエル・ノヴィン氏はあんな抗議をしたのか。

彼の単純な思い違いというのが、一番考えやすい結論だが、それはどうもしっくり来ない。ファティ・リンシャが客人として招くような人物が、そんなミスを犯すとは思えない――何より、ふたりの勘が訴えている。

何か、ある、と。

つらつらと、本日の記憶を辿りながらナルレイシアは気になる点を口にした。

「浮かれてたのと、当代を名乗ったひとがまだ若かったから気のせいかと思ったんですけど……なんか、作品の内容と、違和感があるんですよね。サインいただくときはまだ読んでなかったからわからなかったんですけど」

マギル・レヴィンの作品は時代によってさまざまな作風を見せる。

重厚な経験の裏打ちなしには描けないものもあれば、若々しい息吹に満ちたものもある——マギル・レヴィンという名前が初めて世に出てかれこれ二世紀、そうした作風の変化があまりにも大きすぎるために、いつしかかの作家は単独の存在ではなく、作家集団であり、代々その名を継いできたのだと言われている。そもそも二世紀も生きる人間はいないから、そう思われるのも無理はないのだが——いかんせん、ナルレイシアとスカルトードは、この世にそれぐらい生きる存在があることをいやというほど知っている。

いや、世間一般にもその存在は知られているのだが、謎のヴェールに包まれた部分

が多すぎて、誰もその可能性については考えようとしないのだ。
いや、ふたりにしても、まさかそんなことはあるまいと考えているのだけれど。
（世界の御柱の君が、作家として活躍中だなんて、無理があるし）
とは思う。
思うのだが。
（でも、伝説の吟遊詩人の正体が放浪の柱神さまだったって実例はあるのよね）
因みについ最近代替わりした柱神は伝説の琴に夢のような歌を乗せ、天上の光景を見せる奇跡の化身だったりする。
それを考えると、全くありえないことではないとも思えてしまう。
そして、その果てに行き着いた可能性といえば。
（いやいやいや、それはないでしょう！　第一、マギル・レヴィンの視点はあくまで男性のものだしっ！　第一、わたしあの方が日記と手紙以外にペンを走らせてらっしゃる姿なんか見たことないし！）
ファティ・リンシャが性別を偽って作家活動しているなどあり得ない――一緒に暮

らしていれば、さすがにそれぐらいはわかる。
だが。
一度気づいてしまった可能性を考えれば、他の存在はどうなのかと思いは広がる。
たとえば、このディエーンの柱神アマンシール、ガライラの柱神ネイスリーズ、他にも大勢いる男性柱神の誰かがそうなのかもしれないと思えば、謎に包まれた大作家マギル・レヴィンについての説明も、ある程度ついてしまうのだ。
では、あの紳士は何者なのか。
そうした、世間的にはあからさまにできない事情を踏まえた上で、彼らの代理人を務める人物ではないのか。
だからこそ、ファティ・リンシャの知り合いでもあるのではないのか。
暴走する想像は、どこまでも果てしない。
「いったいどなたが……」
思わず呟いたナルレイシアの耳に、どうやら同じ可能性に行き着いたらしいスカルトードの声が届いた。

「大伯父上はありえない……あの方は文字に関しては読むのも書くのも大嫌いだから……そうなると、他に可能性があられるのは……」

どこまでも似たふたりである。

ナルレイシアが、そんな同志にマギル・レヴィンの正体についてさらなる議論を持ちかけようとした時のこと。

「そろそろ、いいか？」

と、この上なく冷ややかな声が扉のほうからかけられた。

ガスカールだ。

「そろそろって何よ？」

「まるで今まで待っていただいていたような言い回しですが？」

ナルレイシアとスカルトードがふたりして、心外とばかりに問い返したところ、黒髪の青年はふんと鼻で笑って言い切った。

「この二時間というもの、本との睨み合いに夢中で、こちらが声をかけても一言の返事もない。そんな連中にバケツの水をかけることもなく、じっと待っていた相手にず

いぶんな言いようだな？」

これにはふたりとも声もなかった。

好きな作家の新刊を前にすれば、一心不乱に読みふける――その間、どれほど声をかけられようと、気づく可能性は限りなく低い。もしかしたら火事が起こっても気づかないかもしれない。

「うわ、う……それは、ごめんなさい」

「申し訳ない」

無条件に謝るふたりを、黒髪の青年公爵は冷たい目で見やりながら、顎をしゃくった。

「応接室だ。おふたりとも待っておられる」

予想に反してきつい言葉ではなかったが、なぜかナルレイシアには別の響きをもって聞こえた。

『待たせやがって』

単なる聞き違いとは思えなかった――。

※

「単刀直入にお尋ねしますが、オウエル・ノヴィン殿は、いったいどのような立場の方なのでしょうか？」

スカルトードの率直すぎる問いかけに、件の紳士もファティ・リンシャもすぐには答えなかった。

代わりに、数世紀を生きる、外見的には初老の貴婦人にしか見えない女性が逆にふたりに問いかけてきた。

「二人とも、問題の本はもう読んだのでしょう？　どう感じましたか？」

非常に答えにくい問いに、ふたりは顔を見合わせた。

先ほども話し合ったことだ、結論は出ている――しかし、はっきりと偽書だと主張していた本人の前では口にしにくい。

だが、本の虫同盟を結ぶ者として、こと書籍に関する直感を偽ることはできない。

「真作だと思いました」

「わたしも、そう思います……文体や癖までおかしな点はなかったと。文章が若い印象は受けましたが、マギル・レヴィンの作品では珍しいことではありませんし……」

この答えに、銀髪の老婦人は「そうでしょうね」と頷いた。

そうして、着替えを済ませたオウエル・ノヴィン氏に、咎めるような目を向けたのだ。

「……やっぱり、充分な事情も話していないのね。どうせ、順序立てて説明しなかったんでしょう、結論だけを突きつけるのはあなたの悪い癖ですよ」

外見年齢はほとんど差のないふたりだが、さすがに実際に生きている年数が違う――ファティ・リンシャの年長者としての物言いに、オウエル・ノヴィン氏は気まずそうに目を逸らしながら言い訳した。

「しかし、は……ファティ・リンシャ。今回の出版物が、マギル・レヴィンの著書と認知される事態だけは避けなければならないことに変わりはございません」

苦虫を噛みつぶしたような顔で言い切るオウエル・ノヴィン氏とは対照的に、ファ

ティ・リンシャはのんびりした様子のまま、とんでもないことを言い出した。
「そこまで目くじらを立てる必要はないと思いますけどね。あからさまに贋作だと知れる内容ならともかく、このふたりが真作だと感じるぐらいの出来なのでしょう？放っておいてもいいのではないかしら？」
この発言に、黙っていられなかったのはナルレイシアとスカルトードだ。
「ちょっと待ってください、ファティ・リンシャ！　見抜かれなければ贋作でも構わないとも受け取れるそのお言葉だけは看過できません！」
「そうです、ファティ・リンシャ！」
顔色を変えて言いつのろうとしたふたりに、現人神である女性は困ったように微笑んだ。
「ごめんなさい、わたくしも説明が不足していたわね。この……彼の管理能力不足のせいで、この手の騒ぎが起こるのは初めてではないものだから、つい端折ってしまったわ」
そう言い置いて、彼女は驚くべき真実を口にした。

「あなたたちが感じた通り、今回出版されたという本は、マギル・レヴィンの真筆には違いないのよ。ただし、本人に出版する意志がなかったというだけで……そうですね、オウエル？」

確認を取る女性に、紳士は渋面のまま頷いた。

「……あれは、推敲途中で放り出……いや、充分な完成度に満たないと見切りをつけた原稿です。エピソードのひとつが気に入って、完全破棄する気になれずに取っておいたのが仇になりました……」

悄然とそう打ち明けるオウエル・ノヴィン氏を前に、ナルレイシアとスカルトードは目を丸くした。

（推敲途中でって……破棄する気になれなかったって……）

その意味するところは――。

「……もしかして、今回出版された本を執筆されたのは、本当はここにおられるオウエル・ノヴィン氏だということなのでしょうか？」

マギル・レヴィンの真筆を執筆したのが目の前の紳士だというのなら、彼こそが正

しく――！

「「あなたがマギル・レヴィンご本人なんですか!?」」

綺麗に二つの声が重なった――。

オウエル・ノヴィン氏は、相変わらず気まずそうな顔を崩さぬまま、それでも否定しなかった。

※

思いがけない展開に、ナルレイシアは口をぱくぱくさせた。

（この方がマギル・レヴィン……子供のころから憧れて憧れて止まなかった伝説の……）

驚きとともに、感動がじわじわと胸に湧き上がる。

（ああぁ、言いたいことがありすぎて、言葉が出て来ないわ！　『蒼穹の果て』の素晴らしい展開はどうやって思いつかれたんですか、とか『隠されたユライカの儀式』

はどこまで真実なんですか、とか……ああ、本当に本当に、言いたいことや訊きたいことが山ほどあるのにぃっっ！）

言葉もなく、ふるふると震えるだけの自分が情けない。

（当代を継いだばかりだという方には訊きたくても訊けないと思ってたけど……って、あら？）

驚きと衝撃と動揺が大きすぎて、重要なことをぽっかりと見落としていた事実に、この時になって初めてナルレイシアは気づいた。

（ええっと……この方が正真正銘のマギル・レヴィンご本人だということは……今日、本屋でサインをもらったあのひとは……）

もしかして、いやもしかしなくても。

「真っ赤な偽者ってこと!?」

木槌で思い切り頭を殴られたような衝撃だった。

サインをもらうために、どれほど苦労したか……サイン入り新刊を死守するためにどれほど気をつけたことか。不幸中の幸いの権化と呼ばれる自分にとって、何事もな

くサインをもらうということは、奇跡に挑むに近い大難事だったのにっ！

無事にサインをもらった時は、「運命に勝った！」とさえ思ったというのに！

あの喜びも達成感も、全部全部――！

（ぬか喜びだったなんてっっ！）

酷い。

酷すぎる。

この世に神はいないのか――いや、目前に現人神のひとりはいるわけだが、それも忘れるほどにナルレイシアの嘆きは大きかった。

そして――。

隣にいる人外美貌の青年は、彼女とはまた違う心境に至ったらしい。

「……許し難い冒瀆ですね」

地を這うような低い声を耳にした時、ナルレイシアはそれが誰のものか即座に理解できなかった。

地獄の底から響くような、それはそれは恐ろしいものだったのだ。

「わたしたちがどれほどの期待を胸に今日のこの日を迎えたか……いえ、わたしたちだけではありません。整理券を手に期待に顔を輝かせたファンがどれほどいたことか……！　到底見過ごせることではありません！　このような悪辣な所行は、たとえ神が許そうとも、このわたしが断じて許さないっ！」

普段声を荒らげることのない青年の、溶岩にも似た激しい怒りに震える声は、ナルレイシアの心を激しく揺さぶった。

「その通りです、スカーさんっ！　マギル・レヴィンを愛する全ての読者のためにも、こんなことは断じて許してはいけません！　あの不届き者に正義の鉄槌を下すのは、真実を知ったわたしたちの義務です！　どかんと下してやりましょうっっ！」

ひし、とスカルトードの手を握りしめ、ナルレイシアは叫んだ。

「ヴィル・ダカール！」

「スカーさん！」

かけがえのない同志と互いを認め合うふたりは、周囲のことも忘れて熱く見つめ合い――そうして。

義憤と同義の私憤に燃えるふたりは、偽マギル・レヴィンへの報復……もとい、正義の断罪を誓い合ったのである。

……当事者であるはずのマギル・レヴィン本人を置き去りにして。

4

「まず肝心なのは、今回の悪行が偽者の単独犯行なのか、それとも出版元も一枚噛んでるかですよね」

単独犯なら偽者ひとりを締め上げればいいだけだが、組織だった犯行であった場合、断罪の内容が大きく変わってくる。

さて、どうやって確認を取ろうか――小首を傾げるナルレイシアの蜜色の双眸は、熱意にきらきらと輝いている。

「聞いたことのない版元だったので、気になって少し調べたんですが、どうもきな臭いのですよ。主に自費出版物を取り扱うという名目で、正式な版元として登録していないようで……」

スカルトードの言葉に、「確かにきな臭いですね」とナルレイシアは同意を示す。
「おまけに、当人に無断で絵姿を印刷して販売しているらしく、そのことで騒ぎになったことも一度や二度ではないらしいですね」
ちょっと調べたにしては、内容が詳しい——きっと情報の専門家であるランディータに頼んで調べてもらったのだろう。
「もしかして、わたしたちが整理券もらいに行った時、しつこく声をかけられたのって、そのためだったんでしょうか。確かにスカーさんの絵姿なら飛ぶように売れますよねぇ」
なるほど、と頷く少女に、同志の青年は呆れたように答えた。
「ヴィル・ダカール、他人事のようにおっしゃらないでください。あなただって、同じくらいしつこくつきまとわれていたでしょう」
「それは、きっとスカーさんを釣るためですよ」
「また、そのように無自覚な……」
「……話題がずれかけているぞ」

ぼそりと口を挟んできたのはガスカールである――ふたりの暴走を懸念したらしいファティ・リンシャがお目付役を押しつけたのである。

当然のことながら、これ以上はないという渋面だが、そんな青年公爵のことなどふたりは構っていられない。

「やっぱり偽者本人を押さえるしかありませんよね。あくまで白を切る場合を考えれば、きちんと身元を洗っておくべきかしら」

「それは把握済みです。さすがは専門家と言うべきでしょうね、ランディータの情報に抜かりはありません。ただ……」

ふう、とスカルトードがため息をついた。

物憂げな表情も絵になる彼だが、さすがに眼福を楽しむ場面ではない。

「何かあったんですか？」

真剣に尋ねるナルレイシアに、スカルトードが小さく首肯した。

「例のサイン会の後、部屋に戻った形跡がないらしいのです。どこかに隠れているのだとしたら、見つけるのはなかなか骨が折れるかもしれません。なにぶんにも……」

スカルトードの言わんとしているところは、ナルレイシアにもすぐにわかった。

脳裏に浮かぶのは、少し気弱そうに見える二十代の青年の、どこにでもいそうな平凡な顔だ。

サイン会で見た偽マギル・レヴィンは、特徴らしい特徴がないのが特徴という、困った容姿の主だったのだ。

「茶色の癖毛と褐色の目の中肉中背の二十代男性ってだけじゃ、ランディータさんでも捜すのは難しいですよねえ……こんな大それたことをしでかすぐらいだから、もう少し悪辣そうだとか性格が歪んでそうとか根性がねじ曲がってそうな顔をしてくれてたら良かったのに」

初めて見た時、「温和そうなひとですね」と好意的に評したことは、すでに忘却の彼方である。

「まったくです。せめてカールやマルシアス侯爵ぐらい特徴的な顔をしてくれていれば捜しやすかったでしょうにねえ」

因みにガスカールもマルシアス侯爵アシュアイードも、人外魔境とまではいかない

が、十人が十人、一度目にしたら決して忘れないに違いない美貌の青年だ――しかし、そっくりな大伯父の美貌は認めるくせに、自分の顔にはさしたる興味を持たないスカルトードの感覚は少々ずれている。

そして、本の虫同盟の同志である少女にしてもそのあたりは似たり寄ったりだったりする。

「……難しいですよね。単独で隠れてるのならそのうち食料が尽きて外に出て来るでしょうけど……」

「協力者がいれば、いつまでだって隠れていられるでしょうしねえ」

ふたりはそこで揃って息をついた。

「こうなったら、だめもとであの書店を当たるしかありませんね」

不本意と顔に書いて、スカルトードがそう言い出せば、ナルレイシアが「いいえ」と頭を振った。

「スカーさんの人外美貌はこの間披露してしまったから怪しまれずに探りを入れるのは無理ですよ。その点わたしなら、サイン会の日はフードで顔を隠していたし、以前

声をかけられたことを理由にあの店に行ってもおかしくありません」

名案だと信じて疑わないナルレイシアの提案は、そばにいるふたりの青年によって即座に却下された。

「馬鹿か、お前は。歩いてるだけで災難を引き寄せる特異体質のくせに、わざわざ火中の栗を拾おうとしてどうする。収拾のつかない大騒ぎになるのは目に見えてるだろうが！」

「そうですよ、ヴィル・ダカール。ただでさえ怪しい場所に、よりにもよってあなたが飛び込んだら何が起こるかわかりません。それぐらいならわたしかカールがやったほうがまだ安全です」

ふたりとも、ナルレイシアを気遣っているのか、結果として起こるに違いないと確信している騒ぎを心配しているのか判断に困る台詞である。

ナルレイシアが多少拗ねたくなっても無理はないだろう。

「そんな、ふたり揃ってそこまで言うことないじゃないですか」

わたしだって、十回に一度ぐらいは騒ぎを起こさずにすむことだってあるんです。

全然安心できない言い分に、当然ふたりが納得するはずがない。
と、その時――。
「……嬢……」
呼びかける声に、ナルレイシアははっと息を呑んだ。
（え、今の……!?）
この場で聞くはずのない呼びかけに、反射的に振り返った彼女は、そこにごほごほと咳き込む初老の紳士の姿を認めた。
ずっと同席しておりながら、これまで口を挟むことのなかった――ナルレイシアたちの熱意と迫力に満ちたやりとりに、その隙を見いだせなかったというのが正しいが――オウエル・ノヴィン氏だ。
「いや、お嬢さんがた、そこまでで結構だ。そもそもはわたしの不注意から起こった騒ぎだ。そこまで調べてもらっただけで、充分だよ。書店にはわたしが行こう」
しかしこの一言に対する三人の答えは決まっていた。
三つの声が綺麗に重なる。

「「駄目です！　一番警戒されるに決まってるじゃないですか！」」

※

それで結局どうなったかといえば――。

翌日の午後、オウエル・ノヴィン氏を加えた四人の姿が問題の書店にあった。

誰が行くかで無限ループ状態となった話し合いに呆れたファティ・リンシャがあっさりと言い切ったのだ――。

「みんなで行ってくればいいじゃないの」

と。

それができれば揉めたりしないと誰かが口を開くより先に、現人神の女性はありがたい一言をのたもうた。

「あちらに見えなければ、書店のどこだって調べ放題でしょう？」

……つまり、柱神の力で彼ら四人の姿を他者から見えなくしてあげるから、さっさ

と出かけてけりをつけてらっしゃい、ということだ。
現世に関与しないはずの柱神が、そんな犯罪めいた行為に手を貸していいものか――などと言い出す人物はその場にはいなかった。
物事は常に臨機応変に――ナルレイシアたちは勿論、オウエル・ノヴィン氏の座右の銘も同じだったらしい。
かくして、四人は堂々と問題の書店へと乗り込んだのである。
ファティ・リンシャの魔法は完璧で、誰も彼らには気づかない。一応透明人間の実在を確信させるような真似――たとえば人目のある場所で勝手にドアを開け閉めしたり引き出しを漁ったり――は控えたが、拍子抜けするほど簡単に事態が進む。
（うーん、順調すぎて怖いぐらい。柱神さまが基本的に現世に関わらないようになさってるのって、便利すぎる術とかに人間が頼り切りにならないようにってことなのかも）
今回はご厚意に甘えてしまったけれど、これからは気をつけよう――ナルレイシアは密かに心に決めた。

人間、やはり神に頼む前に、人事は尽くすべきなのだ。

そんなことを考えながら、二階の事務所に上がったときのこと、言い合うような声が一室から聞こえてきた。

（何か言い争ってるみたい……）

何者かは知らないが、偽マギル・レヴィンの居場所を知る手がかりになるかもしれない——四人はすかさずドアに耳を寄せた。

「そんな話は聞いてない！」

聞こえてくるのは若い男性の声だった。

「わたしがマギル・レヴィンのふりをしたのは、偽者が現れたらきっと本人が姿を見せるに違いないって、あんたたちに言われたからだ！　ご本人にお会いできたら、きちんとそのことを謝るつもりだったし、サイン会に来るのはあんたたちが集めたサクラだけのはずで、本だって全部回収する手はずだったじゃないか！」

怒りに震える声の主は、どうやら捜していた偽マギル・レヴィンらしい。

だが、想像していたのとは、話が大きく違うようだ。

（本物を引っ張り出すためにわざとなりすますってあたり、思慮が浅いのは間違いないけど、マギル・レヴィンに会いたいって気持ちだけはわからないでもないわね）

もちろん、青年がやったことは間違っているし、サイン会に並んだのは店側が集めたサクラばかりではなかった以上、立派な詐欺罪が成立するのだが。

少し考えればわかりそうなことだが、マギル・レヴィンに会えるという一言に、青年が飛びついてしまったのは……いやいや、やはりそこには同情できない。

しかし、である。

「これからもわたしにマギル・レヴィンのふりをしろって、どういうことだよ！　そりゃあ未発表の原稿は他にもあるけど、それは祖父ちゃんが一時期彼に弟子入りしてたから特別に譲ってもらったもので、しかも絶対発表しないって約束したものなんだ！　今回本にしたやつだって、全部回収して焼却処分するって約束だったじゃないか！」

なるほど、とナルレイシアは納得した。

（原稿の出所は偽者くんのお祖父さん、大本を辿ればマギル・レヴィン本人ってこと

ね。真作には違いないから、出版元が詐欺に問われることはない……と）

もっとも、偽者を仕立て上げた時点で立派に犯罪なのだが、この様子だと罪は全部偽者くんになすりつけるつもりなのだろう。

（何だか……気の毒になるぐらい、偽者くんったら間抜けだわ……）

あれほど怒りを覚えた相手をつい〝くん〟付けで呼んでしまうぐらいには。

似たような思いを、他の三人も抱いたのだろう――小声で毒づくのが聞こえた。

「偽者になれと言われた時点で相手が悪徳業者だと気づけ、間抜け」

「大体そんな美味しい話を悪人が放っておくわけがないとどうして気づけなかったんでしょう……」

「イルクスのうつけが……孫を自分そっくりの間抜けに育て上げるとは……」

誰が漏らした言葉かは説明するまでもなかろう。

あまりに情けない顛末に、肩の力が抜けそうになる……が、ナルレイシアはこれで全部が片付いたわけではないことを思い出した。

外套のポケットから、こっそり持ち込んだ品を取り出すと、彼女はスカルトードに

囁いた。

「あのー、実はわたし、念のためにこんなものを持って来たんですけど」

そう言って差し出したのは音の派手な煙玉だったりする。

自分の運の悪さを考慮して用意したものである。

それを見たスカルトードは、思わず見とれてしまいそうな晴れやかな笑みを浮かべて「素晴らしい」と応じた。

「さすがはヴィル・ダカールです。実はわたしも同じようなものを用意してありまして」

同じもの、と言わないあたり、少々不穏なものを感じないでもなかったが、使用目的は同じなのだから、と彼女は気づかぬふりをした。

その隣ではガスカールが「どうせなら、火元は複数と思わせたほうがいいだろう」と呟きながら、懐から何かを取り出そうとしていた。

驚くべきはオウエル・ノヴィン氏である――彼の台詞が一番過激だった。

「……まあ、死人は出るまいよ」

鉄槌を下す相手を特定した四人が躊躇うことはなかった。

数分後――。

店の事務所側から響いた爆音と、溢れ出す白煙――そして「火事だ！」という叫びに、店内は騒然となった。

すぐに何者かに因る悪戯と判明し、騒ぎは収まったが、当然ながら犯人が見つかることはなかった。

そして……事務所に半監禁状態に置かれていた青年が、忽然と姿を消したその謎も、永遠に解かれることはなかったのである。

エピローグ

間抜けな偽者くんとナルレイシアに命名された青年――本名グランシオは、目映いまでにきらきらしい空間で、床に蹲って号泣していた。

自分の馬鹿さ加減に、穴があったら入りたいぐらいだが、自分の罪はそんなことで許されることではない。

祖父から聞いた憧れのマギル・レヴィン――伝説の大作家に会いたいばかりに、子供でも引っかからないような罠にはまってしまい、挙句大勢のひとに迷惑をかけたのだ……。

おまけに自分を騙した相手に捕まっていたところを、あろうことかマギル・レヴィン本人と自分の嘘に騙された被害者ふたりを含む四人に助けてもらったという……最

早どこから謝っていいかもわからない状況だ。

「ずびばぜんっっ！　ぼんどうに……だんどおばびずでば……！」

本当に何とお詫びすれば――と、言っているつもりなのだが、嗚咽のせいで聞き取れるシロモノではない。

もっときちんと謝らなくてはと思えば思うほど、罪悪感と自己嫌悪がこみ上げてきて、まともな言葉にならない。

ああ、なんて馬鹿で間抜けなんだろう――祖父の大恩人の顔に泥を塗ってしまった。祖父にも顔向けできない。

羞恥で死ねるものなら、今すぐ死んでしまいたいぐらいだ。

だが、人間羞恥だけでは死ねるものではない。また自分が命を絶ったところで、罪滅ぼしにも何にもならない。

「ずびばぜん、ずびばぜん、ずびばぜん！」

涙と鼻水で顔をぐしゃぐしゃにして謝り続けるグランシオは気づいていなかったが、広間は何とも言い難い生ぬるい空気に満たされていた。

グランシオ救出に関わった四人は、小さな子供のように号泣する青年の姿に、先ほどまでかろうじて残っていた怒りすら持続不可能となっていたのだ。

それどころか、小さな子供を寄ってたかって苛めているかのような居心地の悪さまで覚える始末。

（いい加減、泣き止んでくれないかしら……でないとわたしたちのほうこそ悪人になった気がするんだけど……）

こっそりとため息を漏らしながら、ナルレイシアはそう思った。

しかし、下手に声はかけられない。彼を許すか否かは、やはり名を騙られたオウエル・ノヴィン氏がまず決めることだからだ。

騙されたということでは、自分とスカルトードも確かに被害者だが、おかげでマギル・レヴィン本人と知り合えたわけだから、どちらかと言えば得をしたと言えないこともないわけで……。

（あ？　やっと静かになった。泣き止んでくれたのね、よかった……）

これで何とか会話ができる――と思ったのはナルレイシアの早合点だった。

何とグランシオは、泣き疲れてその場で眠ってしまったのだ！
最早笑うしかない状況に、四人の口から深い深いため息がいっせいに漏れた――。

※

泣き疲れた子供もとい グランシオを寝室に移動させた後、ファティ・リンシャを加えた五人は、これからの対応を話し合っていた。
一番の問題は、やはりあの青年の処遇であるが、これはオウエル・ノヴィンの一言であっさり決まった。
「わたしの原稿をあんな世間知らずに持たせていたら、この先何度同じことが起こるか想像もつかん。あいつの持っている分は全部あいつの祖父のイルクスに送り返した上で、あいつ自身はわたしが手元で監督しよう。少しは世間を知ってもらわんことには、危なかしくて仕方ない」
やれやれと言わんばかりの口調に、ナルレイシアとスカルトードは大きく頷いた。

いずれマギル・レヴィンの未発表原稿を譲り受けるだろう青年が、あの様子では確かに見ているこちらが怖い。オウエル・ノヴィン氏は大変だろうが、是非ともびしばし鍛え上げてほしい。

「それで、回収し損ねた今回発行の本に関してはどうするつもりなの？」

ファティ・リンシャの問いかけに、やはり答えたのはオウエル・ノヴィンだ。

「明後日の新聞に回収告知を出しますよ。手違いで推敲途中の原稿が印刷されてしまったから、と。近日中に完全版を今回と同部数発行し、完全引き換え制で回収すると書けば、何とかなるでしょう」

嬉しすぎる台詞に、ナルレイシアとスカルトードが口々に叫んだ。

「完全版！」

「なんというご英断でしょう！」

本の虫たちにとって、これほどのご褒美はない。

残る問題はひとつだけ――グランシオを騙して金儲けを企んだ悪徳業者をどうするか、だが。

これに関しては、ナルレイシアもスカルトードも一枚噛ませてもらうつもりだった。

「えへへ、あのですね、火事騒ぎ起こした時、こんなモノを見つけちゃったんで、ちょっと拝借してきたんですよねー」

そう言いながら、ナルレイシアが取り出したのは一見したところ、単なる帳簿である。

ただし、隠し棚の奥に置かれていたものだったりするから、恐らくただの帳簿ではないはずだ。

「目ざといですね、ヴィル・ダカールは。わたしはこんな怪しげなものしか見つけられなかったんですよ」

スカルトードが持ち出したのは小さな瓶だ。

中身はわからないが、彼の態度から察するに、普通の書店の事務所にあるようなモノではないのだろう。

「お前たち、妙な特技ばかり持つな」

ガスカールが呆れたように漏らすのに対し、ナルレイシアは大まじめに反論した。

「あら、今回はあなたにそんなことを言われる筋合いはないと思うわ。知ってるわよ、在庫置き場を水浸しにしたのはあなたの仕業でしょ？　あの短時間で在庫を全滅させるなんて、それこそとんでもない特技じゃない」

「ですよねえ」

しみじみとした口調でスカルトードも同意する。

「ああ、じゃあそれらも添えて新聞社に送付させてもらうかな。あの店に関わる疑惑記事ぐらいなら今夜一晩で書き上がるだろうし」

オウエル・ノヴィンの言葉に、本の虫たちは大喜びだ。

「マギル・レヴィンの寄稿記事なら、どの新聞社も大歓迎するし、反響も凄いですよね！　ああ、早く読みたいです！」

はしゃぐナルレイシアとスカルトードを、ファティ・リンシャが微笑ましげに見つめている。

その口元に一瞬、悪戯を思いついた子供のような笑みが浮かんだことに気づいた者はいなかった。

そして――。

「ねえ、マギル・レヴィンさん？」

意味ありげにオウエル・ノヴィンを見つめながら、現人神のひとりである女性が、不思議な動きで宙に指を滑らせた。

「今回本当にナーシアとスカーには世話になりましたよね？」

念を押すような彼女の言葉に、何かを感じ取ったのか、初老の紳士は引きつった笑みを浮かべた。

「え、ええ……深く感謝しておりますとも」

「ならば、いつまでも仮初めの姿でいるのは彼らに失礼だとは思わない？　ねえ」

ギスカリール？

ファティ・リンシャがそう呼びかけた瞬間――オウエル・ノヴィンの姿が激変した！

瞬きにも満たぬ間に手品か魔法かという鮮やかさで、オウエル・ノヴィンとは似ても似つかぬ人物がその場に出現していた。

ナルレイシアの目が、大きすぎる驚きに限界まで見開かれる。
なぜなら――そこに現れたのは……否、ファティ・リンシャによって目くらましの術を解かれた人物は。
彼女の故郷にいるはずの、彼女が師匠と仰ぐ一方――彼女の父が「妖怪爺」と呼んで忌み嫌っている……実に数十年変わらぬ姿から仙人とも呼ばれる人物。
「お師さまーっっ!?　そんな、そんな……お師さまがマギル・レヴィンだったんですか!?」
少女の絶叫が広間中に響き渡った――。

※

わたしは、師として心からギスカリールさまを尊敬しているし、作家としてのマギル・レヴィンを敬慕している。
この思いに嘘はない。

だが、時折……本当に時折、何も知らなかった時代を懐(なつ)かしく思うときがある。
夢が夢であったころ、真実を知らなかったころ——無邪気であれたあの……。
嗚呼(ああ)、憧(あこが)れは遠くに置きて抱(いだ)くもの……。

〈——とある弟子が認(したた)めた日記より一部抜粋(ばっすい)〉

終

あとがき

この本が発売される頃は、世間は花盛りとなっていることと思いますが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

こんにちは、前田珠子です

『鬱金の暁闇』第十六巻をお届けいたします。

ラストと女皇の戦いが始まりましたが、まだまだ序盤というところです。ラスらしくない戦い方を書くのに苦労させられました……早く、彼女本来の戦いぶりに戻ってもらいたいのですが、そのためにクリアしないといけない課題が……。

……頑張ります。

次巻も大変な展開になる予定なので、体力をつけて備えたいと思います。

書きたいこと、書かなければならないこと含めて、取りこぼすことなくラストまで舵を切っていきたいです。

今年の冬も、クリスマスローズの花に楽しませてもらいました。種が落ちて発芽(はつが)したものも含めれば、五十株以上に増えてくれたおかげで、今年の春は移植場所を探さなければならないほどになりました。半日陰(かげ)で風通しがよく水はけの良い場所にはすでに密集状態なので、場所作りから始める必要がありそうです。

今回もイラストの小島榊(こじまさかき)さんをはじめ、関係各所の方々に大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

それではまた、次の本でお会いできますように――。

平成二十五年　春

前田　珠子

※「天を支える者 外伝　憧れは遠くに置きて抱くもの」は雑誌Ｃｏｂａｌｔ二〇一三年三月号に掲載されたものです。

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『聖石の使徒』シリーズ、『天を支える者』シリーズ、『空の呪縛』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、今ではすっかり実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



——破妖の剣　6——
鬱金（うこん）の暁闇（ぎょうあん）16

COBALT-SERIES

2013年5月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　前田珠子
発行者　鈴木晴彦
発行所　株式会社集英社

〒101－8050
東京都千代田区一ツ橋2－5－10
(3230)6268(編集部)
電話　東京(3230)6393(販売部)
(3230)6080(読者係)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2013　Printed in Japan

造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。なお、本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。また、業者など、読者本人以外による本書のデジタル化は、いかなる場合でも一切認められませんのでご注意下さい。

ISBN978-4-08-601720-6　C0193


黄金の暁闇
1~15
うこんのぎょうあん
破妖刀に選ばれし少女よ…
愛と正義のために闘え…！
破妖の剣 6
前田珠子
イラスト／小島 榊
破妖刀「紅蓮姫」の使い手に選ばれた半妖の少女ラス。
追われる身となり、護り手の闇主と旅をするうち、
世界の命運を懸けた過酷な戦いに身を投じていく…。
好評発売中
コバルト文庫


破妖の剣 外伝
珠玉の超(スーパー)ファンタジーに酔いしれよ!!
言ノ葉は、呪縛する。
義父レンバルトを密かに想う少女リエンカ。ある夜、レンバルトの秘密を知ったリエンカは…!?
紅琥珀(こうこはく)
異形を仮面で隠した人々が棲むアルバワヌの里で、逃走中のラスと闇主は…!?
前田珠子
イラスト／小島　榊
好評発売中
コバルト文庫


前田珠子
イラスト／山本鳥尾
聖石の使徒
シリーズ
選ばれし子供たちが、世界を守る――!!
其は焔をまとう者
其は力を放つ者
其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ
其は水に遊ぶ者Ⅰ・Ⅱ
揺籃の瞳
蒼の組木箱
狩人の爪
狩人の覚悟
狩人の宝
コバルト文庫
好評発売中



炎の蜃気楼（ミラージュ） 幕末編 獅子燃える

桑原水菜 イラスト／ほたか乱

幕末の京都で、佐幕派と尊攘派の激しい衝突が続いていた。そんな中、数多の怪異現象とともに巨躯の高知弁の男が出没するという噂が流れ…。誰もが知るあの男がついに登場！

〈炎の蜃気楼 幕末編〉シリーズ・好評既刊

炎の蜃気楼（ミラージュ） 幕末編 獅子喰らう

好評発売中 コバルト文庫



ヴィクトリアン・ローズ・テーラー

王子とワルツと懐中時計

青木祐子 イラスト／あき

クリスの宮廷舞踏会デビューが近づくある日のこと。舞踏会のパートナー選びに迷っているという令嬢から、ドレスの依頼が舞い込んで…？　キャラクター総出演の“それから”。

〈ヴィクトリアン・ローズ・テーラー〉シリーズ・好評既刊

恋のドレスとつぼみの淑女
恋のドレスは開幕のベルを鳴らして
恋のドレスと薔薇のデビュタント
カントリー・ハウスは恋のドレスで
恋のドレスは明日への切符
恋のドレスと硝子のドールハウス
恋のドレスと運命の輪
あなたに眠る花の香
恋のドレスと大いなる賭け
恋のドレスと秘密の鏡
恋のドレスと黄昏に見る夢
窓の向こうは夏の色
恋のドレスと約束の手紙
恋のドレスと舞踏会の青
恋のドレスと宵の明け星
聖者は薔薇にささやいて
恋のドレスと追憶の糸
恋のドレスと聖夜の迷宮
恋のドレスと聖夜の求婚
恋のドレスと月の降る城
恋のドレスと湖の恋人
恋のドレスと陽のあたる階段
恋のドレスと翡翠の森
キスよりも遠く、触れるには近すぎて
恋のドレスと花ひらく淑女
聖者は薔薇を抱きしめて
恋のドレスと白のカーテン
宝石箱のひみつの鍵

好評発売中 コバルト文庫



少年舞妓・千代菊がゆく！

最初で最後の恋

奈波はるか イラスト／ほり恵利織

千代菊が舞妓を辞めようと考え始めた矢先、初恋相手の紫堂(しどう)が囲碁のタイトルに挑戦することに。勝ったらプロポーズすると告げられるが、意外な人物が二人の仲を引き裂いて…！

〈少年舞妓・千代菊がゆく！〉シリーズ・好評既刊

花見小路におこしやす♥　　声がわりの予兆
許されぬ想い、かなわぬ恋　　「秘密」の告白

他、43冊好評発売中

好評発売中 コバルト文庫



風の王国 勝利の時

毛利志生子 イラスト／増田メグミ

藩主デーシャの葬送に参列した翠蘭(すいらん)。その道中、同行したデパーニ家の娘たちの命が狙われる事態に！　全ての問題を根底から解決するため、翠蘭はネパール王との交渉に臨む!!

〈風の王国〉シリーズ・好評既刊

風の王国	月神の爪	臥虎(がこ)の森	金の鈴	砂の迷宮	春の使者
天の玉座	河辺情話	花陰の鳥	嵐の夜(上)(下)	うつつの夢	山の上の賢者
女王の谷	朱玉翠華伝	波斯(はし)の姫君	星の宿る湖	水面(みなも)の花	王杖(おうじょう)の守者(しゅしゃ)
竜の棲む淵	目容(もくよう)の毒	初冬の宴	黄金の檻	王太子の花嫁	抱玉(ほうぎょく)の臣(しん)

好評発売中 コバルト文庫



プリンセス・レッスンはルビーのお城で

山本 瑤 イラスト／文月路亜

世界中の令嬢が集う全寮制学校（ボーディングスクール）に複雑な出自を隠して在籍するソランジュ。そんな彼女を婚約者と名乗る皇太子が迎えに来た！ その正体はかつてのルームメイト、アレクシスで!?

〈プリンセス・レッスン〉シリーズ・好評既刊

薔薇色プリンセス・レッスン

好評発売中 コバルト文庫



おいしい乙女の作り方

椎名鳴葉 イラスト／雁 えりか

魔女の呪いによってニンニクしか育たないジズ村で、弟と二人暮らしのマナ。ある日、逃げた鶏を追って辿り着いた廃教会の地下で大きな棺を見つけた、保存食が入っていることを期待して開けてみると、中からこの村の元領主を自称する騒がしい吸血鬼が現れて…？

好評発売中 コバルト文庫



リリー骨董店の白雪姫
ラプンツェル・ダイヤモンドの涙

白川紺子 イラスト／宵 マチ

１９世紀、英国。マーチ伯爵家の跡継ぎであるクレアは、ロンドンに骨董店を開く決意をする。令嬢が店を構えるなど前代未聞の行動だが、骨董品の『声』を聞くことができるクレアは、伯爵家に伝わる「レディ・アン・ジュエルの呪い」を解く鍵を探しているのだ…！

好評発売中 コバルト文庫

コバルト文庫

俺物語!!

下川香苗
アルコ[作画]
河原和音[原作]

大人気コミック
「俺物語!!」を
完全小説化(ノベライズ)!!
大好評発売中!!

1

話題の〝俺〟
コバルトでも
大暴れ!!



不器用だけど真っ直ぐで熱いハートを持つ猛男は男子の人気者！　ある日、猛男(たけお)は大和という女の子を助けるが…？

苦しくても恥ずかしくても、
それでも毎日が
キラキラしてる――！

大人気コミック
「アオハライド」を
完全小説化（ノベライズ）!!
大好評発売中!!

阿部暁子 原作 咲坂伊緒

アオハライド

AO—HARU—RIDE
THE SCENT OF AIR AFTER THE RAIN.
I HEARD YOUR PULSE. I SAW THE LIGHT.

1 周りから浮かないよう自分を偽って過ごす双葉（ふたば）。ある日、中学時代の初恋の人に似た男子に出会うけど…？

2 悠里（ゆうり）も洸（こう）のことが好きだと知り、双葉の心は揺れる。それでも双葉は洸が隠す過去に踏み込もうとして…？

3 中学の時行けなかった夏祭りに行く約束をした双葉と洸。微妙な関係からの進展を期待する双葉だけど…？

コバルト文庫

コバルト文庫　雑誌Cobalt

「ノベル大賞」「ロマン大賞」募集中!

集英社コバルト文庫、雑誌Cobalt編集部では、エンターテインメント小説の書き手を目指す方々のために、広く門を開いています。中編部門で新人発掘の性格もある「ノベル大賞」、長編部門ですぐ出版にもむすびつく「ロマン大賞」。ともに、コバルトの読者を対象とする小説作品であれば、特にジャンルは問いません。あなたも、才能をこの賞で開花させ、ベストセラー作家の仲間入りを目指してみませんか!?

大賞入選作　正賞の楯と副賞100万円（税込）

佳作入選作　正賞の楯と副賞50万円（税込）

ノベル大賞

【応募原稿枚数】400字詰め縦書き原稿95枚～105枚。
【しめきり】毎年7月10日（当日消印有効）
【応募資格】男女・年齢は問いませんが、新人に限ります。
【入選発表】締切後の隔月刊誌『Cobalt』1月号誌上（および12月刊の文庫のチラシ紙上）。大賞入選作も同誌上に掲載。
【原稿宛先】〒101－8050　東京都千代田区一ツ橋2－5－10
（株）集英社　コバルト編集部「ノベル大賞」係

ロマン大賞

【応募原稿枚数】400字詰め縦書き原稿250枚～350枚。
【しめきり】毎年1月10日（当日消印有効）
【応募資格】男女・年齢・プロアマを問いません。
【入選発表】締切後の隔月刊誌『Cobalt』9月号誌上（および8月刊の文庫のチラシ紙上）。大賞入選作はコバルト文庫で出版（その際には、集英社の規定に基づき、印税をお支払いいたします）。
【原稿宛先】〒101－8050　東京都千代田区一ツ橋2－5－10
（株）集英社　コバルト編集部「ロマン大賞」係

応募に関する詳しい要項は隔月刊誌Cobalt（2月、4月、6月、8月、10月、12月の1日発売）をごらんください。

9784086017206

ISBN978-4-08-601720-6

C0193 ¥510E

1920193005103

定価本体510円＋税



コバルト文庫

ラスと乱華の母・チェリクが、緋陵姫のため、その身をなげうった——。壮絶なまでの母の愛を、それでも乱華は拒み続けて…！　闇主が跪き、遂に「五要の闇」すべてを従えたラスは、世界の終わりのカウントダウンを前に「雛の君」とどう向き合うのか？　また、ラスの仲間たちは…!?　そしてラスの父・王蜜の君も、ある結末を心に決めていたのだが!?　大ヒットシリーズ、前代未聞の展開へ…!!